

---

## A.U.R.A. The revision

貴志真 夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A・U・R・A・The revision

### 【Nコード】

N0411K

### 【作者名】

貴志真 夕

### 【あらすじ】

【A・U・R・A・】 それは殺戮兵器という人類の英知。汎用型人型兵器、通称【アウラ】。

戦争を求める人類が生み出した業だった。

少年は業に両親と妹の意識、そして自身の両脚を喪った。嘗てあった日常は一瞬のうちに幻と消え去った。

五年後、再び築いた平穏な日常 隣人と、幼馴染と過ごす日常に少年はいた。しかし日常には常にアウラがいた。偶然か必然か、綻ぶ日常の中で自身も戦争に身を投じることとなる。憎むべき存在を、

身を守る術として天使のアウラをその手に握って。

枢は独り、見舞いの帰りにとある廃墟へと彷徨う。おぼろげな意識は、一つの意志に呼び寄せられて。崩壊する建物から逃げ出そうとする枢の前に、降り立った一機の巨人。逃げる枢は、謎のアウラに救われるが……。

心穿たれた少年は、純白のアウラを以って戦場を駆け廻る。

8 / 29    ブランク    それは何かしらする人間全てを例外なく苦しめる悪魔である。

## ACT・000 ガール・ミーツ・ボーイ

前方から、視界を覆い尽くすほどの飛来兵器<sup>ミサイル</sup>が迫っていた。それらはオレンジライトを尾として、空気の焼ける轟音を伴って虚空を裂く。

その迫る異質な数は、帯びる光で尚異質さを浮き彫りにしていた。ただおぞましく、ここに在る空間を騒がしく掻き乱していた。

僅か広がり、再び窄む様に各々が軌道を描く。それが集束する一点、そこにいるのは 鋼鉄の巨人。

ヒトで在りながら鋼の身であり、鋼の身でありながらヒトの姿を模しているそれは、悪魔とすら呼ばれ畏怖を集める存在。全身に鋼の装甲を張り付けたヒト型の重機。従来の兵器とは一線を成す、新たな次元にいる存在だった。

それは前方に備え付けられた噴射口<sup>ブースター</sup>を使用し、後退していく。脚部と地面が擦れるけたたましい音が仄暗い空間に火花と共に撒き散っていた。

巨人はその手に持つ鈍色の銃器と共に右腕を動かした。モーターの駆動音が静かに、しかし重く響く。

銃口が向く先はミサイル群。先が合致した途端に、マズルフラッシュが辺りを照らした。振動と高熱を銃口に与えながら、雨の如き銃弾は射出されていく。

マシンガンに分類されるその銃器は秒間十数発をその口から吐き出すもの。放たれた銃弾はミサイル装甲など容易に打ち破る威力であり、現に今巨人が放った鉛玉は容易く目の前のミサイルを砕いていた。

銃弾により爆発した幾許かのミサイルは、また別のミサイルを爆発を誘い、やがて伝染的に破滅は広がっていく。

圧倒的な光量に巨人を駆る少女は目を細めるが、緑橙とした“光の足跡”は目に焼き付いてしまった。

『サイトリカバー視界回復、開始します』

AIの声を聴く少女　巨人を駆る少女は、その鋼鉄とは想像もつかないほどに華奢だった。コンソールを操りトリガーを握る指、ペダルを踏む足はとても細く、細い硝子細工のような可憐さを感じさせる。

しかし彼女は、被る灰色のヘッドギアの隙間から強く光の籠った瞳を虚空に投げていた。

光の足跡が消えるまで数瞬だろう。しかしその数瞬は戦場に於いて重要な要因だ。ファクター即ち要因は　取り零したミサイルの接近を少女に許させた。

驚きに息を呑みながらも、再びトリガーを引く。即座に射出された弾丸はミサイルを砕いていく。間一髪、正にその言葉が合うほどに紙一重だった。

通常のミサイルであれば、一発や二発で膝を着くほど彼女が駆る巨人は脆くはない。仮にも人類の英知で在り、悪魔とすら呼ばれた現行兵器だ。だが、それですら抗えない何かを、先ほど消滅したミサイルは持っていた。

暗い辺りに転がるのは鉄の死骸　。彼女がいるこの企業が置くセキユリティアウラの　あのミサイルに囚われたアウラの成れの果てだった。

まだ機能は生きている。その証拠に巨人捕捉し続け、そして“向こうの暗闇に潜むもう一機の巨人”カメラアイを赤い瞳は探し求めている。紅く、息づくようにぎらぎらと蠢き点滅するも、まはたき何故かその四肢が動くことはなかった。

到底その原理が少女に分かる筈がなく、ただその脅威に侵されぬように努めるしか術は無かった。

『ロックオン被捕捉を確認』

AIの声を聴き、死骸に配らせていた意識を前に向ける。それとほぼ同時に暗闇の奥からはまたもあの群棲が浮かび上がっていた。まるで、あれらは蟲だ。光に群がり、餌に食いつき貪る蟲。そんなおぞましさと気味の悪さを少女は感じた。背中に走る悪寒を思考の隅に追いやり、少女はトリガー握る指に力を入れる。

少女は敢えて、前進した。背中のブースターを吹かしながら、両腕を前に向ける。左右対称に握られた銃器。それらから出る銃弾を余すことなくミサイルへと撃ち込んでいく。

しかし、密集する率が低いのか、もしくは数が多いのか、全てを壊すことは叶わなかった。

速度は緩めずそのまま、両の銃を下に向け、巨人は装填する。破棄された弾倉が音を立てて地面へと落下した。

だがその直後には、彼我の距離は縮まっていた。    蝗の鳴き声が振動する。

ミサイルが機体を掠める瞬間、巨人は左翼へ瞬間移動した。直後には、巨人はその場にいなかった。

まるでその動きは座標間の移転。線の動きではなく、或る点がそこから消え別の地点に出現しただけ。早すぎるその動作は、途中を満足に可視させてくれはしない。

更にもう一度前方へ、そして右翼へと瞬間移動。丁度稲妻形に回りこんだ巨人は水平に両腕を向け、右の銃では視線を巡らすことなく背後からミサイルを撃ち落とし、左の銃口ではそのミサイルを担う存在を探していく。

「……いない？」

だが、暗闇の中に巨人はいなかった。

何処に消えた。そう視界を、ミサイルの破片が振る雪景色を背中に、巨人の眼を通して動かした。



幾度と繰り返したが、彼の巨人には意味を為さなかった。ただ憚然と構え続け、死の断罪を対峙者に与え続ける。浪費した時間が生まれただけ。そしてその時間は光を更に蒼くしただけだった。

少女は歯を絞り、行動を次へと移す。弾丸が役に立たないならば、その行為を続けても無意味だ。

だったら、回り込む　　！

必ず、どんな機体にも脆い個所がある筈だ。厚くして強度を誇るなら尚の事、発泡式やリアクティブアーマーの形態を取っていたとしてもそれらはどうしても構造上装甲へ取り付けるだけにとどまってしまう。

そう、だから、狙うは間接。もしくは　ミサイルの発射口だ。

蒼くただらう目標物を中心に捉え続けながら、巨人は再び稲妻形に突き進んでいく。敵機の銃口追従は甘かった。膂力な代わりに鈍足なのだろう。

巨人は再度、両腕を下ろして装填する。弾倉が音を立てて落下した。既に残弾は限界が来ている。加えて、敵機の光量も満を期しそうだ。急がねばならない。

それらを思考しつつ、巨人は尚小刻みに動き続け、徐々に回り込むように進んでいった。

少女の視界には噴射口熱量限界や推力枯渇度合いのメーターが映っている。それらは既に安全許容グリーンゾーンなど満たしておらず、警告範囲イエローゾーンまで突き抜けていた。

だが、止めるわけにはいかない。

蒼白の巨人は緩慢な動作で、巨人を追いつける。巨人はそれを先回るように、逆時計方向に回っていく。巨人の脚部は地面との摩擦で火花の涙と共に金属の悲鳴が上がり続けていた。

「取った……！」

そうして、やがて巨人は背後を取ることに成功した。



敵機の背部には四つの隆起があった。人体で言う肩甲骨の部分に左右対称一つずつ、その下あたりで更に一つずつで背骨を挟んでいる。恐らく、それがミサイルの出所だ。光が少なく見えないが、ミサイル射出の為の展開口が本来なら見えるはず。

あそこなら、脆い筈だ。

巨人は左翼へと回りながら、両腕の銃器を敵機へと向ける。サイトの中心は、彼の弱点へと。

しかし、少女の思考には一つ気がかりがあった。それは敵機の背部に付いている装備だった。あの隆起はいい。

しかし、二つほど突起が存在していた。それはただのデザインなのか、アンテナなのか。デザインにしてはあまりに目立たなく、アンテナとしては意味を期待できそうにないくらいに短い。

少女は危惧を振り払い、トリガーを絞った。

しかしその直後、少女の網膜を焼くような 赤い“翼”が瞬いた。

否。翼というのは少女の錯覚だ。精確には、あれはブースターだった。噴射口の形状と、飛び散る光子とがまるでそんな幻影を他者に植え付ける。一瞬で、神々しい光は暗く公拡な密室を照らし上げた。

光が暴発する中、巨人が放った弾丸は虚空を穿ち続ける。しかし翼を生じた巨人は、その弾丸が喰らうよりも前に、その場から“消失していた”。

少女の眼は、再び光の足跡を刻まれていた。巨人と遠く離れた場所では、既に翼の巨人は顔を少女へと向け、背部の発射口を展開していた。

少女は眩しさに眼を絞りながら前を見やる。緑の足跡に隠れ“蟲”は少女へと迫っていた。

しかし先ほどより量は少ない。緑の隙間からどうにか少女はそれらを捉え、両の銃口を向ける。

再び眼の前で翼が羽ばたいた。巨人の背に翼が生える。脚部が鳴

らす音さえも飛び越え、膂力な巨人は再び転移した。

少女は、だが、眩む眼のせいでそれを捉えられない。

記憶を頼りに、ミサイルの対処を続ける。敵機がまたあの“何か”をやっていたのは見えた。しかし、ミサイルが迫っているのも事実だった。歯噛みし、そちらを対処するしかなかった。

ミサイルの破裂する音を聴くと、巨人は瞬間移動した。<sup>ステップ</sup>右、前、左、そして緊急旋回。<sup>ターン</sup>敵機がこちらへと向かっているのならば、これで逆に回りこめるはずだと、治り掛けた視界で少女は巨人を駆る。しかし、復活した少女の眼が捉えたのは、右から、壁の如く空間を貫く蒼い光の軌跡だった。

「ぐ……っ！」

真横からだった。巨人はこちらに向かっていたと思ったが、その実右へと動いていたらしい。あの翼を二度使ったのなんなのか、とにかく、少女の眼がその時使い物になっていなかったのは致命的だった。

このままでは光へと突き進む進行方向を、緊急旋回と瞬間移動を同時にこなし、苦肉ながらも八時方向へと曲げていく。<sup>ターン</sup><sup>ステップ</sup>しかし、右腕を“引っかけて”しまった。

これらは刹那の動作。一秒も、その十分の一にも満たない命の取り合いだった。

『右腕部、<sup>ダメージ</sup>損傷。パージすることを推奨します』

半分持つて行かれた！

左腕で射線方向へ銃器を向けつつ、少女はAIの提案を了承する。既に巨人の右腕は肘から先を焼かれていた。断面からは色彩様々なケールが顔を出し、そこから火花を散らしていた。差し詰め、この火花は人間でいう血だろうか。

損壊という痛々しい絵を表すには十分だった。とにかくこれでは……使い物にならない。

「くそ……。右腕<sup>うわん</sup>を切除<sup>バージ</sup>……！」

残心こそあれど迷いなく、少女は巨人の右腕を切り落とした。次いで、息つく間もなく敵機はミサイルを零していた。

先のミサイルの量が少なかったのは、そういうことか。

この二度の連撃の為に、巨人は余力を残していた。ただそれだけだった。

隻腕のまま、回りながら巨人はミサイルへと銃器を向け、弾丸を放っていく。

しかし、見えてしまった。奥で蒼い光が極限まで膨らむのを。どうやら、あちらも余力を残していたらしい。

少女の眼が見開かれる。

とにかく、ここから離れなくてはいけない。大丈夫。あの機体の足は鈍い。自機の脚なら、十分に振りきれろ。

少女は奮起し、ミサイルから離れるために後方へと瞬間移動した<sup>ステップ</sup>

が、その背は壁に衝突してしまった。

追い込まれていた？ 首に来る衝撃を受けながら、少女は現実<sup>スチ</sup>に驚くしかできなかった。

そうして、一瞬の停止の際にミサイルは迫った。銃口を向けるが既に遅い。残りたったの三発だったミサイルは、全弾少女が駆る巨人を捉え、その爆発を浴びせた。

瞬間に止まる推力。少女の視界に映っているメーターはほぼ完全に推力枯渇を表していた。

『メインブースターに異常発生。復旧までの時間、不明』

普段ならブースターを休めていればすぐに回復するメーターは、

一向に上がりきらなかった。0か1か2か。100の内たったその程度ぐらいしかメーターは増えず、しかもそれは直ぐに消えてしま

う。  
トリガーを必死に動かすが、巨人のブースターが動作する気配は全くない。脚部を動かすも、冗談みたく動きが鈍い。

一体これは、何だというんだ。  
眼の前の奥では、蒼い光を携えた銃口が少女を捉えていた。

「あ」

少女の口から声が漏れた。

それは恐怖からか、絶望からか。ただ少女の心から、何かの光が潰えたのは確かだった。

元よりあれは、きつと逆らうべきではなかった。人間にとって少女が乗る巨人が悪魔ならば、巨人にとって彼の天使は悪魔だ。例えその身が端麗なものであるとも、恐ろしすぎるものは怖れる対象でしかない。

脅威はミサイルでも何でもなし。単に、あれ自体が脅威なだけだった。そんな単純なことを、少女は死の淵で漸く気付いた。

逃げ出すのは、叶わない。入り口はあれの後ろにある。自分が此処へ逃げ込んで追い込まれたのだから、当然か。

助けは、到底間に合わない。必要な時間はあの時二十と言われた。確実に間に合わない。

あれの動きを止めるのも、叶わない。既に先ほどダーズの弾倉全てを叩きつけた。加えて、ここに来るまでに数発グレネードを浴びせている筈だ。今更出来ることは何もない。

じゃあ、何だ。何も出来ないのか？

焦る心で思考を転がすが、何も浮かばない。ただ歯が鳴るだけで、もはや体に力すら入らない。

だけど死にたくない。死にたくない。

少女の願い空しく、光は限界までに膨れ上がった。巨人はその両腕で、しっかりと銃口を巨人　少女に向かって合わせた。

死ぬ。少女はそれを確信した。確信してしまった。膨れ上がる光に眼を瞑り、トリガーをただ握り締めて、目の前の現実から目を背ける。

「姉さん……っ」

死に際して、涙ながらに少女は声を絞った。

助けを求める声、脳裏に浮かぶ偶像に問いかける声。最愛の者を呼ぶ声は、何を求めるでもなくただ漏らした声で在るならば、それはやはり死を認めた事を表していた。

少女は眼を瞑ったまま身を固め　凡そ数秒が経った。

「……？」

意識は健在していた。死んで魂だけの存在になったわけでも、走馬灯のように自分だけが時間を長く感じているわけでもないようだった。

ゆつくりと、瞼を上げる。脳に映りこむ光景から認識できるのは、自機の目の前に何かが立ちふさがっているということ。まるであのレーザーから自分を庇う様に。無防備に背中を見せて。その背中は、不思議と暖かく安心する。

あの天使のような機体もそうだが、目の前に居る機体もまた彼女が今まで実際に見た事がない機体であり、また天使のようだった。だがこちらは、断罪に來た武力天使ではなく、御告げを与える救済天使。そんな印象に、二機と比べると別れてしまう。

庇う様に、威容たる背中を見せる機体。その背部には、あの巨人と同じ突起が存在していた。

全体のボディカラーは穢れを知らぬ純白。細い腰付き、細い腕に

細い脚。その全身は華奢な細身のフォルム。

だが、決して脆弱とは形容できないほどその姿は何処か偉観としていた。反射する純白からはむしろ、神々しささえ感じるほどだ。

『 助けに来た』

「貴方、は？」

白刃<sup>はくじん</sup>たる神秘的なそれはまるで無翼の。

『 今度は僕が 君を護る』

そう “ 無翼の天使 ”。

/ A・U・R・A・THE REVISION

ACT・001 チャンシズ・ア・ラストダイアリー（1）

空が綺麗だった。澄んだ様に蒼いパレット、その中に所々白い絵の具を零したような風景……それが窓ガラスの向こうに広がっていた。

いつもは気にしない癖に、眠い日は朝の到来とともにそれらを憎らしくすら思う癖に、日の匂いだの鳥の囀りだのを堪能する。そんな自分に苦笑しつつも、<sup>かなめ</sup>枢は深く息を吸った。

「はい。出来たよ、枢君」

掛けられた声に振り向くと、そこには黄色いエプロン姿の女性。ピンクのタートルネックセーターに包まれた袖の先、手に握られているのは青色のハンカチに包まれた弁当箱だった。

「ありがとうございます、<sup>あかね</sup>茜さん」

「いいえ。どう致しまして」

茜は微笑んだ。それは今枢が浴びている日差しよりも、何倍も暖かいものだった。

「というか……本当、いつもすみません」

「だから、気にしないで良いつていつも言ってるじゃない」

「……ありがとうございます」

その言葉に、枢は思わず苦笑してしまう。

「五年か……」

「え？」

「いや何でも」

「……んん？」

小首傾げる枢の横で、茜はそんなことは知ってか知らずか目を細めて景色を眺めていた。

茜に習い、枢も再び視線を移す。

行き交う歩行者、道行く車両、遠くで走る通勤電車。それは既に見飽きた風景。ここにきてから十分すぎるほど視界に入った。

それらはきつと、日常だ。何処かこの日常埋没出来ないのは気のせいだと、枢は目を絞る。

「でも、良かったよ」

「何がですか？」

「だって君、こんなに元気になったじゃない」

言葉とともに、茜は枢に笑いかけた。それは外に広がる景色よりも眩しく、広がる空よりも枢が心を打つ笑顔。既に長い間見てきた笑顔。

あの時から今まで、ずっと支えられてきた笑顔。未だに、枢の心は彼女の笑顔に動かされる。これだけは変わらない。

「茜さんのお陰ですよ」



「いやいや、あの子達のこと、忘れちゃダメでしょう？ 枢君」

「……勿論、美沙都や冬夜も居なければ、僕は駄目でした」

「そう。きっと私は……君を支えただけ。でも、彼らは君を立ち上がらせてくれた。……違う？」

「その通りだと、思います」

よし、と言いながら枢の頭を乱暴に撫でる茜。髪がぼさぼさになるとか頭が揺れるとかあるが、枢は茜のこれが大好きだった。

だから思わず、顔が綻んでしまう。

自分もこんな風に、この手で“彼女”を撫でることが出来ていたのだろうか。

と、隣を見れば、顎に人差し指を当てて何やら茜が首を捻っている。何を考えてるのか、その表情からではイマイチ分からない。

「よしじゃあ……あれだよ。美沙都ちゃんにはお礼と称して何処かご飯でも食べに行きなさい」

「ええ？」

何故そんな展開になるのか。

「駅前の喫茶店。あそこは女の子に定評があるんだよ。うちの学生も良く帰りに　っていうか私も帰りに寄ること結構あるし。あつと、まあとにかくあそこのお店は良い感じだから、是非誘ってあげなさい」

「でも美沙都忙しいからなあ……」

「大丈夫大丈夫。喜んで来てくれるって」

「でもこう、僕が何か言っていると結構めんどくさいとかそいついづこと言うんですが」

「それは君、あれだよ」

「え？」

「“ツンデレ”って知ってるかい？」

「……」

「あれ？ 知らない。ツンデレっていうのはねえ」

「いえ、その……行ってきます」

茜が大学へと進んで以来、どんな友達と付き合っているのか知らないが、めきめきと知識をつけて来ていた。

そのことに複雑な思いを胸に抱きながら、枢は茜に見送られながら玄関を後にした。

朝と変わらぬ空を見ながら、枢は両目の瞼を下ろした。目を瞑れば、真っ暗な視界のまま小鳥の囀りが聞こえ、木々のさ

ざめく音が聞こえ、それらはまるで今の枢にとっては子守唄のようだった。

「この日本にいると信じられないだろうが、今、この瞬間も世界では戦争が起こっているわけだ」

しかし、子守唄はそれだけではなかった。

「中東の辺りや、東欧の境辺じゃ特に酷いだろうな。……それに比べ、日本は安全だな」

うつらうつらと睡眠の波へと船を乗り出し始めた枢には、初老男性教師の声など、子守唄以外の何物でもなかった。

「これは良くも悪くも、未だ日本は政治面において攻撃的、積極的でないからだな。日本の外交情勢から仕方がないというのもあるが……ま、ちょっと前までは日本に軍隊がなかった訳だ。

何かと軍事を振るう事に関しては批判的な団体がいる。仕方がないんだろう。……軍隊が出来たのは、君達が生まれるより何十年前か……三十年は悠にあるのか？」

顔に皺を刻みつけた男性教師が教壇の前で足を止め、手に持つテキストから顔を上げ、生徒たちへと目を配らせた。奥、左右、手前と目を動かしていき、やがて一点で停止する。

「よし、じゃあ 伊東。何年に軍隊が出来たか、分かるか？」

名前を呼ばれた女生徒は一瞬肩を震わせた。教諭と目を合わせまといと視線下げていた努力空しく、おずおずと顔を上げた。

女生徒 伊東の座る席は机群の列に於いて一番前。加えて教壇

の直ぐ目の前。当てられるのは仕方のない事だった。

「えっと……2039年？」

小首を傾げながら伊東が言ったその言葉を聞いて、教師は苦笑と共に嘆息した。

「まあ、惜しい。49年だ。これは常識だぞ？ もし推薦入試の面接で聞かれて答えられなかったら、即不合格と思っていい」

その言葉に伊東ははい、と間延びした声で答えた。

「で、だ。2049年に日本にも軍隊が設立された。軍旗は桜。

まあ、君達はあまり感じないかもしれないが、先生は当時凄く驚いたんだ。これは憲法の根本を改定したという事だからな。改正前の日本の憲法は、当時の国連に指示されて出来た ようなものなんだが……日本が軍隊を持つということは、その国連<sup>かれ</sup>らが認めたという事になる。今でも、先生は信じられんくらいだよ」

まさしく考えられない出来事だろう。凡そ五十年前に生きていた人間にとって、この事は誰が予想していただろうか。

いや、予想はしていた、軍隊が再び設立されるということ自体は。

憲法第六十六条。内閣は文民のみで構成される。これは既に矛盾している。戦争を放棄した日本に、“文民ではない国民が存在するはずはない”のだから。

故にこれは、そういう事態を想定した上で設けられたものなのだろう。日本の憲法は解釈の歴史を繰り返し続けるものだ。

話を聞いている生徒も、教師の表情を見ればその深刻さは如実に感じ取れる事だった。

「何故、そんなことまでして日本は軍隊を作ったか」と、単純だ。世界の情勢 更に言えば戦争に関する状況が変化したという事だ。ここ数十年で科学技術は格段に飛躍した」

だが、と教師は鼻から憂いの息を漏らして苦笑混じりに。

「哀しいことに、その科学技術というのは主に戦争においての技術だった。簡単に言えば、“我が国は武力、軍隊を所持しません”とか言ってられる状況じゃなくなっただな。何とも物哀しい話だ。今まで膠着状態だった情勢が、曲がりなりにも話し合いで問題に当たっていた情勢が、これも簡単に兵器という単純な力で崩れてしまったんだ」

そう言って再び目を向ける生徒の大半は真面目に授業を聞いていた。それは先程伊東が指されたようにこの男性教師は授業中頻繁に指名するから、というのと、今の話に関心を持っているというのが混濁した状況。

しかし、顔を上げた生徒に混じって、がっくりと肩から首を落として船を漕いでいる生徒はいた。

空を見つめ、気持ち良くなってしまった少年 久遠<sup>くおん</sup>枢。顔を僅かに上げては落とすという動作を何度も繰り返す。その度に雑把に切られた黒い前髪が揺れていた。

「昔じゃ考えられなかったんだぞ？ 軍が本気で人型のロボットって、あいつまた寝てるな」

教師はその生徒の姿に気づき、白髪混じりの頭をボリボリ掻いた。チヨークと教科書を教壇に置き、机の間を縫って枢へと近づいていく。

枢の机の真ん前に仁王立ちするも、気づく気配は一切ない。変わらず頭がこくりこくりとしているだけだった。迷うことなく教師は右腕を振り上げ、

「寝るなっ！ 枢！」

そのまま枢の後頭部に落とした。

ゴッソ、という非常に生々しい音が周りの生徒達の耳に届き、痛そう　と心の中で皆呟く。

その爆撃モドキを受けた枢は俯いたまま、震えながら、涙目になりながら後頭部に両手を持っていった。

目を見開き、喉を開くだけで声にならない。痛みを訴える声を上げられないほどの痛みが、枢には伝わっていた。

一度深く息を吸い、勢いよく教師へと顔を向ける。

「先生がそんなに殴って良い　いてっ！」

最後まで言葉を聞くことなく教師は2度目の拳を振った。

「そついうのはまともに授業受けてから言わんか！　……ったく、何度言ってもぼけっとしてるところは変わらないんだな」

そう言い残し、悶える枢に目もくれず教師は足早に黒板へと戻っていった。

その背中を目尻に涙を浮かべながら、枢はじっと見送る。

「……全く、お前は」

その様子を見ていた隣の男子生徒　柄崎冬夜つかはなきふゆは教師と同じように溜息を吐いた。呆れ九割混じりの溜息に対し、枢はまだ少し幼さ

の残る顔立ちで、頭を摩りながら眉を顰めた。

「だって、眠いものは眠いんだからしょうがないじゃん……」

その声が教師の耳に届いたのか、未だ年老いても衰えない眼光で  
枢を一瞥する。目を逸らす枢。

その様子に内心呆れ、教師は仕切り直しをする為に一度、咳払い  
をした。

「えー……何処まで話したんだか。ああ、そうか。ロボットの事だ  
な。 柄崎、今の主力兵器の名前を言ってみろ」

「え！？ あ、えーと。【アウラ】……です」

冬夜が隣 枢を見て、遠慮がちにそう言った。その言葉に、枢  
の目を擦っていた動作が停止する。その単語を聞くと、どうしても  
身体に馴染まず、枢の脳裏を鈍く押し潰すような感覚を受けてしま  
う。

【アウラ】。

そう心で確かめるようにもう一度反芻するも、良い思いは全くし  
なかった。

むしろ胸に広がるのは、心臓を鷲掴むような悲しみ。それにつら  
れて、両足の膝に電撃の様な神経痛が起こった。枢はその痛みに僅  
か顔を顰める。

不意に、背中になにか軽く刺さる様な感触がした。

右腕の脇から覗けば、後ろの女生徒からシャーペンの背で叩かれ  
ていた。更に枢が腰を捻じって後ろを向くと、笑いながら四つ折り  
の小さな紙が渡された。

次いで、教室の後ろ側をちよいちよいと指で示され、そちらへ視  
線を動かす。

一人の女生徒と目が合った。目を逸らされる。その時に肩まで伸びているさらさらな黒い髪が舞っていた。

柩は苦笑して、前に向き直り紙を開き、中身を吟味する。

“大丈夫？”

そう、女子特有の丸っこい字で書かれていた。その言葉に返事する。

“大丈夫、ありがとう。美沙都”  
みさと

感謝の念を込めて後ろの女生徒に手紙を回して貰った。

また窓へと視線を動かせば、先程と何ら変わらない空が在った。

何も無い。雲が浮いていて風が少し吹いているだけの不変な風景だけれど、この空の下の何処かでは硝煙が絶えず立ち昇っている

【アウラ】の存在に因って。

現在、世界の化学技術は数十年前とは比べ物にならないほど進歩した。かと言って、何処ぞのSF漫画の様に空飛ぶ車が在ったり、服装が特殊であるという事はなかった。そういうわけではないが、なかみ本質は著しい進化を遂げた。身近な所で言うとPCのスペック、同じく携帯の性能等。

そして、科学技術の進化イコール戦争技術の進化と言える。

その実、殆ど身の回りにある家電用品は、戦争技術の応用によって出来た代物なのだ。テレビに然り、電話に然り。せんそう

科学技術の進歩に伴い、やがて世界は核に固執する事を止めていった。

所詮核とは見張られている限定兵器だ。扱い辛さではこれの右に並ぶものも、上に立つ存在もない。

故に使う事も出来ず、ただ所持してお互いに睨み合っているだけではどうしようもない。



かといって強硬的に核を使うわけにもいかない。即座に国際の輪というものから外されてしまう。それは危険極まりない。輸入に一切頼らず生きていける国家など、まず有り得ない。

既に条約で雁字搦めの兵器よりむしろ、出来るのであれば新兵器の方が扱いやすい。そして、その出来るであれと言ふ仮定が実現してしまった。ただそれだけだった。

何より、研究者の興味を引くのは既にほぼ完成の姿を見せる兵器である核よりも、更に未知で画期的な前衛の存在である兵器の方だ。

いや、核にもクリーンな兵器へと目指す、なんていう楽しみもあるにはあるが、所詮そんな行為は犯罪である。

核に固執していた狂心科学者は多く存在していたし、今もしている。だが、時代とともに離反していくのは歴然としていた。

なればこそ、新技術を、新兵器をと。

それにより生まれたのが次世代人型兵器――【アウラ】。

勝利への渴望が、力への熱望が殺戮兵器を生み出した。思想の違い、身分の違い、理不尽を感じる不平等さ。それらが途絶えることは決してない。生物として単純で、明確なプロセスだった。

何より、戦争は儲ける。

供給が需要を上回るなど有り得ない夢のような産業分野。様々な国家企業が、この【アウラ】開発に参入していった。

いわば、現在の世界情勢は“戦争飽和”状態。数多の国は、他国の戦力を恐れる。そして他国に劣らぬよう、自国の武力を高める。これより下はあるのかというほど、最悪の循環だった。

【アウラ】 正式には【The Armaments Universe Reigns Anew Weapon】。【君臨する新たな兵器】の名を冠する最新鋭人型汎用兵器 通称【A・U・<sup>アウラ</sup>R・A・U】である。

分類上は歩行型戦車とでも言うべきか。要は重機に於ける地上での移動を“キャタピラ”ではなく“脚”での移動に成功した代物。これによるメリットは計り知れないだろう。

誰も皆、その兵器に使われている世紀の大発見なんていう興味の薄いものはその陰に押しやりながら。

だが無論、“ハードウェア”が優れているだけでは意味がない。オペレーティングシステムそれを補う中身が必要だ。多岐情報一元管理化、ファイアコントロール独立型火器管制、敵味方識別装置（IFF）それは挙げればきりが無い。

だが一つだけ、どんな補助システムよりも背筋を凍らす存在があった。それは俗に【フェイクス】と呼ばれる異端者であった。

寝てはいなかったが授業は聞かず、そんな状態のままいつの間にか四時限の授業終了のチャイムを柩は聞いていた。

ゆるりと顎を肘から離し、周りを見渡せば皆思い思いの行動に移っていた。

財布片手に教室の外へ飛び出す生徒。弁当を持って駆け出す生徒。その場で弁当を広げる生徒。そして、

「ご飯にしよう？」

教室内を移動して弁当を広げようとする女生徒。

冬夜は真っ黒なハンカチに包まれた弁当箱を自らの机に広げ、美

沙都 たちかわ 立川美沙都は柩の前の席の椅子を引きそこへと座り込む。

そのままさも当たり前の様に、柩の机上でピンクのハンカチに包まれた弁当を展開していた。

それに対し柩も特に気にせず、机の脇に掛けてあった手提げ鞆から弁当を取り出し、二人に倣う様に広げた。

三人で共に昼食を取る光景 実にこれは、10年近くも繰り返された光景であった。

二人と出会った時は小学校いっぞやのガキの頃。それ以来ずっと付き合ってきた友達だった。枢が数年前の苦を経験してから今もこうして生きているのは、間違いなく彼らのお陰だろう。

その事に感謝しつつ、白米から立ち昇った湯気で構成された水滴を落とさぬよう、枢は気を付けて弁当の蓋を開けた。

そこから顔を覗かせた中身は、少年に似合わずファンシーだった。

「ちょ、ちよっと……枢、これ……何？」

美沙都は目を皿にしたまま、敷き詰められた白米を指差して言った。

「えーと……」

「……また、隣のお姉さんってこと？」

途端に、美沙都の目は皿から三白眼へと切り替わる。

「いや、えーと……まあ、多分」

枢はその眼に気圧されるように僅かに身体を後ろに逸らしながら、自分も白米を見やる。

だが、じっくり見てもそれがただの白米ではないことは間違いなかった。そこには、海苔が載せられた白米。所謂海苔弁というやつだろう。

その海苔の形が“ハート型”でなければ、普通ので済んだだろうに。

「何、これは。何なの？ これは。ねえ」

「あつと……えーと」

迫る美沙都の迫力に、柩は愛想笑いの様なひきつった笑顔の様な、奇妙な表情を受けべる。

とは言え、柩には見覚えはない。確かに柩は、隣に住む大学生の女性、茜には 迷惑だからと断ったのだが 毎日弁当を作って貰っている。

向こうも忙しいのに関わらず、手を抜いた様子が見られないお弁当には頭が上がらない。

しかし、こんなことは初めてだった。

「なんでっ、ハートっ、なのよっ！」

「ス、ストップ、美沙都。正直僕にもこれはよく分からない。だから落ち着いてくれ。ほら、席にちゃんと座って」

「こんなデカデカと乗っけられて分からないなんてある筈無いじゃない！ 今までこんなことは一度もなかったでしょう！ ツ！ ……まさか柩。隣に住んでるからってそのお姉さんと そんな仲に？」

その言葉を美沙都が口にした瞬間に、二人の様子をおかずに食指を進めようと静観していた冬夜も、一瞬動きを止める。すると途端ににやけ顔が強化され、

「……なるほど。するとあれか。柩は隣のお姉さんと……こう……。いやはや、柩も隅に置けないなあ」

「不潔！」

「誤解だ！　ちょ、落ち着いてくれよ、美沙都！　冬夜も無駄に煽らないでくれ！　ああもうっ、皆こっち見てるじゃんかよ！　そんな詰め寄られたって僕だって分からないんだから……あ」

「やつぱり覚えあるんじゃないの！」

「ああ、というかなんというか。……多分、引越してから5年目だ」

事態がやっと収束し、粗方元通りになった後の今も、冬夜の表情はあまり変わっていなかった。にやけ顔のまま、冬夜は箸で鳥の唐揚げを掴み、口に運ぶ所で不自然に動きを止めた。

「……そっぴや次、マラソンだな」

腹五分目にしとくか、と言いつつ唐揚げを冬夜は頬張る。

「柩は、今日は出来そう？」

「んっ……ちょっと、分からないかな。さっき痛くなったから、無理かも」

美沙都の言葉に、柩は机の下で膝を摩りながら言った。

その様子を冬夜は口を動かしながら見ている。そうか、と呟き、冬夜は一瞬視線をそこから大きく外して、口の中の物を呑みこんでから柩の顔を見た。

「　　そういや、俺今日部活ないんだよ」

「へえ、珍しいね」

そう、これは実に珍しい。

冬夜は弓道部に所属している。そして、大会成績優秀者である。確か、半年前だかは地方での大会で優勝を果たした筈、と枢は記憶を引っ張り出す。それだけの實力を持っていれば、当然部の柱だ。二年の身に於いて三年の部員の成績の全てを出し抜いているんだから相当だと言える。

そして、冬夜の体つきはその成績に恥じないくらい、細身ではあるものの、筋肉がしまっていた。ひ弱を自覚している枢にとって、それは羨ましいことこの上ない。

「そ。だから放課後はゲーセンにでも行こうぜ、久々に」

爽やかな顔立ちで、表情を朗らかに崩し眩しい笑顔でそう言った。一体その笑顔に、どれだけの女子の心が射抜かれたのやら。なんて事を枢はその笑顔を見て思った。

## ACT・001 チャンシズ・ア・ラストダイアリー（2）

体育を見学、現代社会を睡眠学習にてやり過ごすという方法で、  
枢はその日一日を乗り切った。

別にやる気がないわけではないのだ。どうしても眠くなってしまう。  
別に生活に退屈な訳ではないのだ。

飽きている、というよりは 世界から目を背けている。そんな  
方向に近い。

とはいえ、今の枢には眠気などはなかった。騒がしいBGMの中、  
枢は冬夜と共にゲームセンターにて音楽ゲームをやっていた。

鍵盤のように並べられているボタンをタイミングよく押すゲーム。  
滝の様に落ちてくるボタン指示の表示を、二人は必死に対応していた。  
た。

ばしばしばしばし！

音楽に負けないくらいのボタン連射音が鳴っている。

“GOOD!”や“PERFECT!”と言った文字が散乱して  
いた画面は、音楽が終了したと同時に、静まり出す。二人は互いに  
表示されていた得点を見。

「いよお~~~~し！」

「ぬお~~~~し！」

数分後、三曲分やり終えた二人はそれぞれの反応をした。  
枢はガッツポーズをし、冬夜は頭を抱えしやがみ込んだ。

「じゃあ、冬夜。来週は学食で奢ってもらうからね。もちろんラーメンの大盛りだよ？ 味噌にしようか醤油にしようか悩むな……あ、でもトッピングでコーンは欲しいなあ。いやむしろ日替わり定食も

……」

「うおおお……俺の小遣いがあ……」

頭を抱え、膝を折って冬夜は苦悩する。その様子に枢は思わず笑ってしまふ。視線を移せば、少し離れた所にいた美沙都も笑っていた。

高校に入ってから、お互いに予定が入るようになった為あまり出来なくなったものの、こういう光景は珍しくはなかった。

冬夜は言わずもがな、所属している弓道部に精を出しているから。容姿が良いことはその端正な顔立ちを見た人間皆納得し、面倒見の良い性格は後輩から好かれ、また弓道の実力が備わっているのだからもうてんでこ舞いらしい。毎日ひっきりなしに後輩が弓道を教わりに来ているようだ。

しかも男女比率3対7。だからたまに、同学年及び上級生で同性の部員にどつかれているらしい。枢もそれに正直参加したかった。

天は二物を与えないのではないか、と詰問したくなる。

美沙都は毎日、家事を母親の代わりに行っている。

父親は小学校に上がるか上がらないかで、交通事故で亡くしてしまい、現在は母子家庭。だから今は母親一人で美沙都を養う為に仕事をしている。

年を重ねるごとに仕事が増えている。それは出世に近づいているということなので一応は喜ぶべきことなのだが、らしく、なかなか家事をしている暇がないので、今では全面的に美沙都が受け持っている。

それもあって、美沙都の料理の実力というのはかなりのものだった。特にお菓子作りに関しては磨きが掛かっていて、昔からよくお世話になっていた。

そう、だから、枢は常日頃から彼女には感謝の念を抱いている。そんな状況下で、自分は彼女に多大な世話を掛けてしまったの



だと。

更に言えば、美沙都も男女共々人気があった。少し姉御気質なところがあるせいか、人の手伝いをする事が多かった。

高校に入ってから既に結構なアプローチがあったと聞くが、不思議と浮ついた噂は聞かなかった。まあ、そんな噂が流れるようなことがあれば、幼なじみ二人と街を歩くなんて言う事もしないだろう。そんな彼らに囲まれている自分は、酷く凡才だと枢は思っている。劣等感を抱いているという程大げさではないが、まあだから、そこはあまり気にしないことにするのが吉。

50円の筐体達に対し、実に五百円まで使ってからゲームセンターの外へと出ると、もう既に日が沈んでいた。二時間以上はいたらしい。遊んでいると時間が経つのが早い事を枢は痛感した。

じゃあな。そう言つて三人は、というより、枢は二人と別れた。

悲しい事に、凡そゲームセンターを中心に、互いが反対の位置になるように各々の家はあるのだ。だから枢は寒空の下一人で歩かなければならない。

腕を捲り、腕時計を見れば時刻は六時過ぎ。冬の季節では、この時間帯でも日は傾いてしまっている。

時間的には、丁度良い頃あいだ。

今から歩けば、バスが来る時間の数分前には停留所に着くだろう。よし、と顔を上げ、枢は歩き始めた。自分の妹がいる病院へと。そうして数分歩いて数分でバス停で待ち、やがて到着したバスに枢は乗り込んだ。

人気のないバスの中、後部の座席へと枢は座った。窓を見る。揺られながら、眼の前に広がる景色に枢が思う事は今いるこの街の脆さだった。

コンクリートで敷き詰められた灰色の道。

そこを歩く悲喜交々の人達。人工石を貫き、地中深くに穴を掘り、

そこを土台に連なる建造物。その中に住まう、或いはその中で日の半数ほど過ごす人々。

首に巻いたマフラーに口を鎮め、街を眺める。雪は降っていないかった。でも空を見上げれば、今日の朝とは違い雲で覆われていた。まるで街を映す鏡のように、灰色が広がっている。

何処か街の雰囲気が暗く感じるのは、きっと自分だけなのだろう。警察と軍をはじめとする人員が街では眼を光らせている。建造物には防犯センサーが、或いは治安維持組織に繋がるホットラインを持っている。

だが、それは強固な守りとはお世辞にも言えないだろう。しかしすでに生活の水準が“其れ”になってしまった今では、それで皆安心してしまう。

「……………」

家や団地を挟んで向こう、流れる景色の奥に、巨大なヒトが佇んでいた。鉄の塊。鋼鉄の巨人。自動車でも何でもない、それは紛れもない、アウラ。

けれど皆既に、そんなものが存在していることに違和感はない。日本全国に散らばる軍基地のお陰で、或いはそのせいで、それが当り前の世界となってしまうている。むしろ子供がはしゃぐくらいだ、まるでパトカーや消防車を見るように。

元々日本は軍隊と密接だった。元来軍事国家であったことや、海外の軍隊が駐在している点を見れば瞭然としている。

憲法解釈の問題で、嘗ての自衛隊も違憲を実際は侵しているのではないかという程の“軍隊活動もどき”も行って来た。

元々憲法は一度死に、再び施行された後も、軍隊を設立出来る土台は随所に見られた。あとは憲法改正に伴う反対人員の問題だけになる。

だがそんなものは、自分達に火が回れば、手の平を返したように

何も言わなくなってしまう。それは既に数十年前に立証された。

……ある意味では、今更なのだろう。そして国民の主体性のなさも、そのメリットかデメリットか分からない順応性に繋がってしまっている。

徴兵制がないことが幸いか。逆にそれが無くとも軍隊が成り立つということも恐ろしいことだが。

あの灰色のアウラが、ここで不意に戦闘行動を取り出したら一体どうなるだろう。

同胞に鎮圧されるか。一機だけならそうだろう。

では二機になると？ 三機になると？ その数は増えるに従って、その数の何乗ものの危険性を増していく。

少なくとも、五機になれば被害は甚大だ。町一つは廃墟と化すだろう。銃弾が撒き散らされ、爆発が人も人工建造物も巻き込み、過去の自然災害を思わせる血と瓦礫の様相を浮かび上がらせるだろう。だが、それを意識している人間が一体何人いるのだろうか。

ヒトは優秀な頭脳を持ちながらも、やはり愚かな生き物だった。群としての学習能力は高くせに、個々の学習能力は極めて低い。それは“喉元過ぎれば熱さを忘れる”という諺があるように、数か月も経てば殆んど忘れ、精々“そんなこともあったね”なんて言う程度に収まってしまう。

流石に、その“熱さ”の当事者は違う。

だが、その“熱さ”を間接的に知った人間はどうだろう。

例えば、テレビだ。いや、新聞でもラジオでもネットでも構わない。とにかく直接ではなく間接的にその“熱さ”を目の当たりにした人間はどうなるか。

例えば災害だろうと、例えば交通事故だろうと、例えば テロでも、だ。

ここの近所に限っては離れているから大丈夫。ここは山が少ないから大丈夫。ここは都心ではないから狙われることなんてありえない。

そんな考えを自分の中で作り上げて、飽くまで他人事として済ませてしまう。

テレビやインターネットの普及で、世界中の事件が即座に手に取るように分かるような時代になった。

情報化社会。素晴らしいのだろう。人類の英知の末なのだろう。

だが、それらメディアのお陰で、見る者へ危機感というものを薄れさせてしまっている。

所詮はモニター越しの自分にとっては非現実。或いは、数が多すぎてそんなことが起こっているのが当たり前だと思ってしまう。

そして初めて、自分の身に“熱さ”を感じて怯えを覚える。

「……………」

枢も、そんな人間の内の一人だった。

こんなことを思えば、いつも膝の関節が痛む。僅かに電気を流したような、断続的な痛み。それが七年経った今でも、枢を尚苦しめていた。

運転手の目的地を告げる声を聞いて、枢は慌てて立ち上がった。立っている乗客を縫うようにして、バスを降りた。

バス停に立ち、バスが走り去る音を聞きながら、枢は目の前にある巨大な建物を見上げる。

デザインは白く清潔な印象。威圧感を与えないよう考慮された上で、目立つように大きさを調整された高さ。

枢が住む市の最も大きい病院である中央病院。それが道路を挟んで建っていた。

「あら？ こんにちは ああいや、こんばんは、かな、枢君。今日は遅かったのね」

ベッドメイクを終え、最後に掛け布団も掛け終えた看護師は病室を訪れた枢に微笑みかけた。

枢は看護師の言葉に目を時計に向けるが、なるほど、既に七時前。いつもは授業を終えて直帰で来る自分にしては珍しい時間帯であることが納得いった。

「こんばんは。今日は少し、友人と遊んでいまして」

「そう。……でも良かったわ。枢君、元気になったみたいで」

「……それ、なんか今日の朝も別の人から言われたんですけど。僕、そんなにですかね？」

「ええ。そんなによ。結衣ちゃんが入院して、初めて君が訪れた時はびっくりしたわ。……私たちつてさ、職業柄、色んな人を見てしまっじゃない？ なんかね、君の目が……重なっちゃったのよ」

色々伏せられた言葉だが、枢には言いたいことは何となく理解出来ていた。可能な範囲でその頃のことを思い出してみれば、確かに、いつ死んでも良いと思っていた。

「でも、僕はもうそんな気はありませんから安心して下さい。僕はここまで来るのに、沢山の人に助けられて来ました。本当に感謝しています。だから、そんな人たちの気持ちを裏切るようなことはしたくありませんし、何より――」

目の前に眠る妹にもう一度笑い掛けたい。枢は自分の手の平を見

つめ、強くそう思う。

「そうよ。結衣ちゃんは絶対、目を覚ますから。そうしたら、枢君、君が一番彼女に何かをしてあげられるんだから」

「……はい」

看護師は枢の言葉に満足し、また笑顔を見せた。

「それじゃ、まだ仕事残ってるから、失礼するわね」

「はい、お疲れ様です」

看護師がスーツの入ったカートを押しながら病室を去るのを見送ってから、ベッド近くに置かれたパイプ椅子に腰かけた。

扉が閉まることで、この病室は沈黙に満たされる。防音性が高められている上に、この病室は個人部屋だ。

沈黙の中ではこの病室の白さが、結衣の白い肌と錯綜させて何故か痛々しい。そんな悲痛な静寂の中、結衣の深い呼吸だけが響いていた。

枢はそつと、眠っている結衣の手を握った。暖かった。柔らかくて、脈も感じる。手だけではない。

穏やかに眠る表情も綺麗で　とても七年間眠り続けているなんて思えなかった。

「……………」

不意に涙が込み上げてきたが、それを必死に抑え、制服の袖で乱暴にぬぐった。結衣の前では、泣きなくなかった。

そのまま、ただただ結衣の顔を見て、髪を撫で、手を握るだけで

一時間を過ごし、柩は病院を後にした。持ってきた一輪の花を、唯一の肉親の為に残して。

/

七年前、日本ではあるテロが起きた。

俗に、“ヘルズタワー事件”。実に百階建てという高さを誇る円状のタワーで起こった事件だった。

事件の名前はヘルズタワーという建造物の名称を皮肉した、嫌な命名だ。

恐らく、日本で初めて起こったアウラによる犯罪だろう。数十機ものアウラが、アスファルトの上を滑走し、巨大な鉛玉を辺りに撒き散らし、回りを廃墟にしていく地獄絵図がそこでは展開されていた。

死者の数は膨大なものだった。……いや、死者の数とは、その日ヘルズタワーに居た人数と近似できる人数だった。

故に、確認された生存者は柩の両手に収まるほどしかない。

そして勿論、そんな状況では死体なんてまともに発見されれば“運が良い”のだ。死体が出ず、かといって生存確認がされていない“行方不明者”など、数えるのも馬鹿馬鹿しくなるほどに存在していた。

「お帰りなさい、柩君」

茜もその事件で弟を喪った。遺体が見つかったかどうかは、柩はよく知らなかった。

「ただいま、茜さん」

だから茜は、枢と自身の弟を重ねていた。

「すみません、遅くなってしまつて」

「ううん、たまには良いじゃない。むしろ枢君は、もっと遊ぶべきよ」

修学旅行中だったという。

都心から離れたこの町から、東京へと訪れた。そして待ちに待った自由時間。予めホテルから遠出する予定だった茜の弟は、友達を引き連れて街を歩き回り。

「あ、今日はシチューですか」

「うん。寒いからね。暖かいものが良いかな、って思つて」

「そうですね。最近はまだ、マフラーが手放せませんよ」

丁度枢より二歳年上で、茜より二歳年下だという。それは生きていればの、話ではあるが。

「……もう十一月も終わりかあ」

「……？ どうしたんです？」

近所でも評判の仲の良い姉弟だったそうだ。

年頃になつても、姉は弟を邪険にしたりなどせず、年頃になつても弟は姉をうざったがらない。それは両親共働きで、二人が家事を手伝う必要があったという環境から、なのかも知れない。



それでも、喧嘩もせずに二人仲が良い、そんな関係が続くということは素晴らしいことで、枢にとっては羨ましいことだった。

ただ、その弟はもういない。

「いやあ、来月はクリスマスだなあ、なんて思ってたね」

「あー……。あー、まあ、そうですね、うん」

「さて。枢君は今年も一人なのかな？」

「ぬ」

「ふふん、まあまあ、仕方ないよね」

「……その台詞、そっくり茜さんに返してやりますよ」

「あ！ この、生意気な。まあ、良いわ。ほら、手を洗って来なさい」

「あはは、了解しました」

茜は弟の話を枢にあまりしなかった。

それは弟のことはもう忘れてしまいたいなんてことを思っているからなのか、それとも妹が意識不明という枢のことを気遣ってなのか、それはよく分からない。

だけど、あまり話をしてはくれなくても、枢の心には印象深く残っていた。

そして思う。もしも結衣があ頃のまま成長していたら、自分たちは仲の良い兄妹だったのだろうか。

彼女の姉弟のように、ずっと仲が良いとはいえないかも知れない。

喧嘩もするかも知れない。絶交だ、なんて言うかも知れない。

でも、それでも、そんなこと言ったとしても、決して自分は妹を嫌うなんてことはないだろう。

そう、“今”、護れなかった妹に対して確信する。

枢が引越してから数週間後に知ったことではあるのだが、五年前、茜は高校生でありながら一人暮らしを既にしていた。

引越しの挨拶、ということで枢が茜の部屋へと訪れた際には、驚いた顔をした。そしてその何日か経った後、エレベーターと一緒になった枢は家族について聞かれ、正直に話した。その時の茜の顔も印象的だった。

以来、枢は茜にちよくちよく招かれるようになった。

初めは食事を何回かし、ある程度親しくなれば勉強の面倒すらお世話になるようになった。

その何回目かの食事の時に、ふと、枢は茜に尋ね、弟のことを知った。

大好きだった弟が死んだ。それ以来家にいるのが辛い。そして君は、何処となく弟に似ている、と。

そう言われたのが丁度枢が小学六年生だった時であり、小学六年生とは茜の弟が死んでしまった歳でもあった。

同じだと、枢も感じた。

「ねえねえ、枢君、本当にクリスマスに過ごす人、いないの？」

「いませんよ、そんな人」

「えー、うつそだー」

「ホントですよ」

「だってさ、あの子、美沙都ちゃんは？」

「なんで美沙都が出てくるんです？」

「なんでって、だって美沙都ちゃんはツンデ」

「ないです。美沙都とは小学校からの付き合いなんですよ？ お互いそういう感情は有り得ないですって」

「ええー？」

「ホントです。昔はよく家に泊まりに来てたんですから。お風呂だつて一緒に入ってた記憶すらありますよ」

「お風呂！」

「だから、有り得ません。まあ勿論、美沙都は色々気を遣ってくれてるから、凄く感謝してますけど、そういう感情とは無縁ですよ」

「はあ……いやまあ、あんまり面識がないから私も強く言えないけど……ふーん？」

「茜さんこそ、どうなんですか。サークルとか、飲み会とかで良い男の人居なかったんですか？」

「えー？ あ、私？ 私はねえ……ふっふ、私と釣り合う良い男なんてそうそういないのだよ」

「何を言ってますか……」

「まあ冗談は置いて。正直なところね、今はどうでも良いかな、

って思ってるのよ」

「それ、五年前から言ってますん？」

「ぐ……。君だって、人のこと言えないでしょう」

「……今はどうでも良いかな、って思ってるんですよ」

「五年前から言ってるじゃない！……いやまあ、あれだね。また今年もお互いフリーなら、例年通り、独り身同士寂しくささやかにクリスマスパーティーを開こうじゃありませんか」

「……そうですね。寂しく」

言いながら、枢の頭の中では何処でケーキを買おうか、何てことを思い始めていた。

## ACT・001 チャンシズ・ア・ラストダイアリー（3）

街はイルミネーションに包まれていた。あちこちから軽快な音楽が流れて来、人々は其れに浮かれる。

横を歩く学生服姿のカップルは、腕を組み肩を寄せ合い寄り添い合い歩いていて。見てるだけでこちらが熱い。男は寒いだろうなんて言っ、女性の素肌晒していた手を自らのポケットに招き入れる。いつの時代だ、何て思う。前の奥には噴水の前で腕時計をじっと睨む女性が一人で立っていた。待ち合わせが遅れているのか眉間に皺を寄せて睨んでいる。携帯電話をバッグから取り出そうとした直後、頭と手で謝罪の意を見せながら男が駆け寄った。そして非難轟々と言った具合に女性は文句を言い、しかし直ぐに呆れたように笑い、男の手を取って歩き始めた。

街は一面のクリスマススムードだ。幸いにしてホワイトクリスマス。温暖化が騒がれるこのご時世に珍しく雪が降っていた。水気が多い雪なのか、人通りが多い場所では踏まれ水溜りのようになっていたが、ツリーだとか屋根だとかは程よく白い帽子を被っていた。何とも神秘的なものである。

元はこの日が何の日なのかあまり考えないのだろう。要は祝える口実があればいい。何かしら特別な日があれば良いのだ。大切な人と共有できるそんな日が。

枢も、その中の一人だった。右手には予約しておいたケーキを持って、思わず綻んでしまう頬を締める努力しつつ、雪を踏み締め歩いていく。何せ建前は独り者同士の寂しいパーティーなのだ。笑っているのはおかしいというもの。

しかし、嬉しいものは嬉しく、楽しみなものはどうしようもなく楽しみなのだ。

本当はクリスマスプレゼントなんて洒落たものを買いたかったが、それは断念した。金銭的な意味もあるし、正直何を買えば良いのか

分からなかった。ぱつと浮かぶのはアクセサリーだったが、そんなものを恋人同士でもない人から貰っても困るだろうし、何より自分のセンスに自信がないという空しさ。貰って箱を開けて一瞬固まり顔を引き攣らせた笑顔でありがとう、何てのは言われたくない。想像するだけで心が折れそうだ。

このことを冬夜に聞いたが実りは得られなかった。忙しくて買い物に付き合ってくれることもなく、貰えたアドバイスも“深く考えるな”の一言だけ。そんなこと言って分かるのは慣れた人間だけだろうが！ そんな空しい枢の叫びは敢えなくスルーされた。どうせ今頃、彼女と二人でどこか行ってるに違いない。もしかしたらいくところまでいったんのかも知れない。時間は早いけど。羨ましい奴め。親友へ、心の中で親指を下げる枢であった。

美沙都に限っては論外だった。散弾銃型マシンガンみたいな、そんな訳の分からない新兵器の様な言葉による銃弾の雨を余すことなく喰らってしまった。何も抵抗する暇なく大破してしまった心の持ち主は退散せざるを得なかった。追い打ちとして後頭部に飛んできた筆箱はきつと二階級特進にもう一個何かくれても良いんじゃないだろうか。そんなことを溜息混じりに思い返す。

赤に変わった信号により、交差点で立ち止まった。頭に乗った雪を払う。そしてその拍子に捉えてしまった光景は、浮かれた心に雪を被るのは人や建物だけとは限らないことを思い出させた。

遠く、建物の隙間から見えるのは警護の為に睨みを効かせている雪を被ったアウラだった。【ペイディアス】と呼ばれる其れは、ライズイール軍が保持する主力戦力。曲線を描くことのない灰色の装甲を纏う、シャープなその人型としてのフォルムは造形美の観点からも高く評価されていた。

枢には、そんなことは一切理解出来ないものだったが。戦争の道具に対して造形美なんてものを感じる觀念が、全く相容れないものだった。

【ライズイール】 事実上世界の経済を担うその大国は、二

十年前に起こった世界を巻き込む大戦を共に生き抜いた同盟国だ。その為か、或いは元々貿易など経済的に結びつきが強かったからか、日本と強い繋がりを持っていた。まだ日本には自衛隊しか存在していなかった時代から、安全保障という名目の下、ラインズイルの軍基地が全国的に配置されていた。それが今でも残っている。『ペイディアス』が日本の地を踏んでいることはそういうことだった。日本軍にも『イナズマ』という機種が存在しているものの、アウラを使った戦争の歴史自体が浅い故に、性能が勝っていてもパイロットの腕はそれに追いついていない。因って、実質ラインズイル軍による警護に頼っている節は強かった。元々技術者気質の強い日本としては、在るべき姿になったとも言えるが、あまり国会は良い思いをしていないようである。

「……くそっ」

痛む膝に、枢はペイディアスから視線を外した。が、そのまま直ぐ、枢は弾けるようにペイディアスに目を向け直した。何の変哲もない。変わらず、毅然と直立している。しかし枢の心臓は脈打ち、そしてペイディアスに強く違和感を覚えていた。

「見られて……いた？」

確かに、視線を外したと同時に、あの赤いカメラアイがこちらへ動いていた。その射抜く先は自分で在ると、枢は根拠もなく強く感じていた。

/

「えー、それでは。独り身同士の寂しいクリスマスパーティーではありませんが…… かんぱーい」

「かんぱーい…… 何でしょうね、その空しい掛け声。     って茜さん？」

柩と向かい合って座る茜は音頭を取るや否や、一目散にその手に持った発泡酒を一気に傾けた。流れるビールは豪快に、音を鳴らす茜の喉に流れて行った。

「ぶはー！ この一杯の為に生きてるぜー！」

「オヤジ臭っ」

「うん、わざと言ってみた。さあさ、柩くんも飲みなすって下さいよ」

「って言ってもこっちはただのコーラだしな……」

当然と言えば当然だが、どうしてもテンションの差が生まれてしまう。

「     ちょ、ペース速くないですか！？」

柩が不満顔でコーラを睨んでいる間に、茜は次を注いでいて、しかも既に再び煽っている所だった。先ほどと同じように口の端に泡をつけて喉を鳴らしてごきゅごきゅ飲んでいる。見た目こそ若い女性だが、これではただの中年おやじに等しい。

「あー…… 二杯連続は効くね……」



「当り前ですよ！ 大体一気飲みで死ぬ人もいるっていうのに……」

「じゃあほら、枢くんもコーラ一気飲みしなよ。あ、むしろ勝負する？」

「意味分かんないんで結構です。それよりペース落として下さいよ。あまり酒強い方じゃないでしょう……」

「んー……まあ、今日は特別。渡したい物もあるしね」

「渡したい物……？」

口元を拭きながら、茜は少し小さな声でそう言った。

「……あ、それより、ケーキ何処で買ってきたの？」

「え？ ああ、えーと、駅前のだっけ……イタリアっぽい名前の所」

「ああ、あそこ……あのアイなんたら」

「そうそう、アイなんたら」

「……あそこさー。ケーキ屋さんとパン屋さんあるじゃん、お互いすぐ近くに」

ナイフで切ったステーキの一切れを飲み込むと、茜は不意に話を切り出した。

「……ありますね」

同じくナイフを動かす手を止め、言われた場所を頭で想像して、  
枢は頷く。

「大体はさ、あそこは生クリームの香りとパンの香ばしさがどっちもあつて、んでどっちもおいしそうだけどさ、たまにパン屋さんから変な匂いしてこない？」

「ああ、ありますね」

「あれ、何？」

「納豆みたいです」

「なつと え？」

「所謂納豆パンらしいです。週一ぐらいで売ってるみたいですね」

「え、売れるの？」

「年輩の方には、割と」

「それって営業妨害にならないのかな」

「んー……どうでしょうね。まあ、結構匂いキツイから、妨害になつても納得ですね。たまに歩いてる犬なんか見るとなんかこう顔が……こんななってます」

枢がその犬の顔真似をすると、茜は吹き出しそうになるのを堪え、

せき込んだ。鼻を内側に寄せたしかめっ面。そんな顔をして予想外に受けたのがなんとなく恥ずかしく、枢は視線を落としてスープを啜った。

「ね、枢くん。今のもつかいやってくんない？ 写真撮りたい」

「嫌ですよ！」

「良いじゃん良いじゃん。待ち受けにするからさ」

「余計嫌ですよ！」

はあ、と溜息を吐いて枢は食事を再開する。じと目で睨むも、茜の調子は変わらなかった。むしろアルコールを吸って強化された気がする。枢はもう一度静かに溜息を吐いた。偽りの溜息を。

大切だった。こうして茜と他愛もない、意味もない、退屈な話をするこの時間が。抱く感情の種類は分からない。何しろ、自分と茜は結構歳が離れている。だからこの感情が“それ”なのか“ただの”なのか。

だが、どちらでも構わないと思う。結局、大切に想うということだけは決して変わりはない。

茜はただ枢を、今は亡き弟と重ねているだけなのかも知れない。だが、やはりそれでも構わないと思う。こうして傍にいられるだけで十分だった。共に過ごす。相手の感情がどうであれ、自分の感情がどうであれ、そうした時間こそが重要なことから。

「で、寝てるし。ホントお酒弱いなあ……」

今度は本物の、呆れの溜息を枢は吐き出した。目の前にはテーブルに突っ伏して寝息を立てるいい大人。もとい、茜がいた。出来

あがる前にボタンであつた。まあある意味では人に迷惑がかからないのだからうけど、それはそれでどうかと思う。それにテーブルに並べられた料理を上手く避けるように伏せていた。なんという所業だろうか。

「さて、どうしようかな……」

選択肢としては運ぶかここで寝かせるか。

「……ここで良いか」

数秒悩み、結論を出す。幸いにして今日は茜の部屋だ。このままでも問題はあるまい。

仕方なくリビングから寝室へと行き、毛布を取って茜に掛ける。その時、茜が僅かに身じろぎし、思わず柩は肩を跳ねさせてしまった。起きては、いないようだ。柩は安堵の息を漏らす。

「……ん」

そしてもう一度茜が身じろいだ。しかし今度はどういうわけか、艶めかしい声つきであつた。意図せず柩は息を飲む。

つい、目が茜の唇に行つてしまう。形の良い柔らかそうな薄い唇は食事のせいで薄くなつた口紅が塗られていた。その瑞々しさに対し、更に息を飲んでしまう。アルコールのせいで火照つた肌、綺麗な睫毛に、投げ出されたセミロングの黒髪。それらは茜の端正な容姿を強調し、女としての魅力を何とも妖しくかもちだしていた。

「いやいや、僕は狼かよ。馬鹿野郎か……」

脈打つ鼓動を強引に抑えながら、ずれた掛け布団を掛け直す。そ

うしてそのまま残された食事や食器を片した。そしてもう一度眠りこける茜を見、

「おやすみなさい、茜さん」

リビングの電気を消し、足音消して出て行った。

「  
ばか」

残された暗闇のリビングで、茜が静かに漏らした声に気づかずに。

## ACT・002 ターン・アウト・ワーフェア(1)

で、そういえば、昨日言ってた渡したい物って何です？

……枢くんってさ、いや、五年も付き合ってたから知ってたけどさ、デリカシーないよね。

……え？

あとあれ、KY。

え！？

はいこれ、お弁当。じゃ、私もう行かなきゃいけないから。

ちよ、ちよつと茜さん！？

「と、というのが今朝繰り広げられた会話でありまして……」

睨んでくる二人を前に、枢は頬に一筋の冷や汗が垂れているのを感じた。

「……枢って馬鹿だな」

「以下同文」

「くうっ！」

冬夜と美沙都に話半ばまで聞かせた所で二人の心情が嫌というほど何となく分かってしまったが、それに堪えどうにか最後まで話し切るも、やはり予想通りの反応が来てしまった。

冬夜はむしゃむしゃと海苔弁のご飯を貪り、美沙都に至っては何かがつつとポテトサラダを掛け込んでいた。二人の視線はじと目と三白眼。前者は良いものの後者は何故か命を狙わ<sup>タマ</sup>れている気がして普通に焦ってしまう。

「えーと、まあ、何というか、自分では良く分からない訳ですが…」

「だから馬鹿だっつんだよ」

「以下同文」

「ぐ、ぐう……」

そう言われても、こちら恋愛なんぞしたことがないでござる。  
女心なんてのは宇宙に果てがあるのかぐらいに謎なのだ。相対性理論を理解する方が遥かに容易だと思うのでござる。何てことは口が裂けても言えない雰囲気であったので、卵焼きと一緒に飲みこむ  
しよ、しよっぺえ！

「ぐ……」ほ「ほ」

「うん？ どうした」

「いや、卵焼きがめちゃくちゃしよっぱい」

「そりゃあれだろ。殺意込められてんだよ」

「何故！」

「お前が馬鹿野郎だからだ」

「ぬ、ぬう……」

そう言われても、本当に何も分からないのだから仕方がない。何が怒りの引き金なのかさっぱりな時点で直しようがないだろう。

「で、どこら辺が馬鹿なのでしょうか、師匠」

「知らん」

「な、し、知らんて……」

「お前から聞いただけじゃ分からんってことだよ。まあ話聞く限り、決め手としては分かるが、どうせ他にも何かあったんだろう。食事してる時の話でもさ」

いや、あの時はただ酔ってただけだぞ……。

「では言ってやる。枢、俺たちは来年から進級して高校二年になるな？」

「う、うん……」

「んで更に言えば、高校二年と言えば身長が170を超えてくるなんて言うのはざらだし、体格だってかなりがつちりしてくる。大人びてくる。お前はまあ……多少成長が遅れてはいるようだが、まあ餓鬼っていうほど餓鬼でもない。顔は幼いが身長もそこそこある。中学から比べると格段に男っぽくはなった」

「は、はあ……」

「だから強引に力づくで女を押し倒せるわけだ」



「なっ!？」

「そういうことだ」

「どういうことだよ!」

「それは自分で考えてくれ。まあ正直これが正解かは知らん。ただ信用されてるだけでも知れんし……でも、ま、俺なら攻めあるのみ……で、その隣人つてのは可愛いんだろ？」

「あー、うん。可愛いってか、綺麗って感じだけど」

「で、五年ずつか……」

ふうん、と頷くと、冬夜は枢の隣を一瞥して不意に立ち始めた。

「ま、あとは知らん。というより俺は退散する。あっちの席で観戦させてもらおうとするさ」

「……は？ いやちょっと待て意味が分からん!」

しかし枢の叫び空しく、冬夜はそそくさと弁当を持って離れて行ってしまう。女子のグループへと軽快に挨拶をして近くの席に座りこんだかと思うと、にやけ顔で何やらこっちを見ていた。当然周りの女子も。

「何なんだよ……全く。なあ、みさと、さん？」

見ればそこには鬼が　もとい、恐らく立川美沙都が黙々と一心不乱に弁当を貪っていた。

「え、えーと……あれ、どうなさったんでしょうか？」

しかし知っていた。長年の付き合い故にこの後の展開はまるで神託を受けたかのように確信していた。生じる理由は分からないが目の前の光景を観測することで得られる予測は明確に出来ていた。

「あーっと、ボクチョットイレイトキマス」

途端にぴたりと止まる筈。

「待つて。その前に聞きたいことがある」

「ナ、ナンデセウ」

付き合ってるってどういうことよ。

そんな叫びが学校のとある一棟に響き渡った。そんな御伽噺が後々語り継がれることを、今は未だ柩には知る由もなかった……。

/

「と……ほっほ」

柩は独り、節々痛む体を引き摺りながら校庭を歩いていた。周りを歩く生徒は彼の纏う満身創痍オーラにこそそと一瞥を向けていく。時折友人が通るも、昼間の事件を知っているが故により柩の纏うオーラは近づき難く感じ、結局声を掛けられずそそくさと家路につくのであった。

何故体が重く感じるまでに損傷を受けているのか　それはあまり考えたくない悪夢であった。そして其処にいたのは間違はなく悪魔であった。何を言っているのか分からねえが、そうなのである。

「とほほ……」

スクールバッグを肩に掛け直しながらもう一度溜息吐いた。

言わば、孤立無援である。美沙都は御立腹で悪魔に変化、冬夜は呆れと部活で相手にはして貰えない。これから確実に来るであろう茜との夕食の時間、まず第一声をどうすれば良いのか。そんなことを考えるが、分らず、かと言って誰かの手助けは期待できそうになかった。

何度か溜息を吐きながら、枢はバス停までのそのそと歩いていく途中、やがてやってきた行き先の違うバスに乗り込みそうになったものの、適当なバスに乗り込み、流れる景色を呆けつつ眺めていた所謂、元々住んでいた枢の実家は今の住居であるマンションとは少し遠い所にあった。バスで凡そ三十分、自転車で四十分といったところであろうか。幸い中学校の学区はぎりぎり美沙都や冬夜と同じ地域であった為、転校という羽目にはならなかったが。

そもその茜との出会いはその時であった。どうにか空元気という処世術を覚えた頃だ。凡そ五年前、引越し先の隣人が茜であった。

枢が引越す決意をさせた要因は、端的に言えば依存から逃れる為だった。七年前、枢は両親を喪った。そして同時に、妹を実質的に奪われ　孤独の身となった。それを真っ白い病室で初めて目が覚め、医者から伝えられた時は絶望した。言葉で表せばなんとあっさりとしていることだろうか。しかし、枢の心は深く何かを穿たれ、奪われ、そして何かが染まった。

枢はその事実を知らされた時、無意識的に医者の首襟を掴んだ。そして何かを叫んだ。しかしそれは酷く要領を得ない物で、誰にも

解することは出来なかった。それが、枢の極度に混濁した感情の現れであることは明瞭だった。

その時、怒りのぶつけどころはその医者だった。医者もそれを覚悟の上で、敢えて両親と妹の治療を行った自分自身の口で伝えたのだった。殴られる覚悟はあった。

しかし、医者に拳が振るわれることは無かった。殴りつけようとしたその時、枢は体のバランスを大きく崩してしまったからだだった。枢はその時“両脚がなかった”のだから、当然と言えるのかも知れない。振り上げた拳虚しく、枢の体はベッドの上に横たわる。そうして自身の現状 無力さ、孤独さ、理不尽さ、そういったものをその動作一つで強く感じてしまい、ベッドに伏せたままそのまま暫く泣き続けた。

以来の枢は一言で表せば荒れていた。物に、人に、何かにあたり続ける日々だった。そうでもしなければ自分の心がもたなかった。目に見える、自分の手が届く何かを患者にしなければ平静を保つことなど不可能だった。結果、枢の病室には日に何度も看護師が訪れることになった。そしてそのあたる対象には、当然の様に美沙都と冬夜も入っていた。

まだ小学三年生の幼い時だ。元来明るく人当たりの良い性格をしていた枢には沢山の友人がいた。当然、彼らも見舞いに来た。しかし、枢は彼らにすらあたり続けた。当たり前前の幸福を持っている彼らが羨ましかった。黒い目でしか、枢は彼らを見れなかった。

次第に訪れる人は少なくなっていた。それでも執拗に見舞ってくれたのが美沙都と冬夜の二人であった。思い返し、枢は何度も二人に感謝していた。二人がいなければ、確実に今の自分はいないのだから。

美沙都とはまだ赤ん坊の頃からの付き合いだった。それも家族ぐるみで。だからというのもおかしいが、彼女がしつこく見舞いを続けたのは納得がいく。

冬夜はまだ知り合って一年も経たないが、それでも彼は通い続け

てくれた。表面こそそっけないものがあるが、彼は心から他人を思いやる事が出来る人間なのだろう。

そうして二年後、柩は漸く眠り続ける妹をその目で見た。安らかに眠っていた。絹の様な綺麗な肌もそのまま、美しく閉じられた瞼睫毛もそのまま、まるで今まで見てきた良く知っている　ただ熟睡しているだけの妹、結衣にしか見えなかった。それが一層、柩に涙を込み上げさせた。白い病室で眠る白い彼女は、何処までもその白さとは遠い場所にいるようだった。

その後、義足をその両脚につけ、柩は退院した。ある一つの決意をして。

退院したといっても、再び学校に通う事は無かった。見舞いに来てくれた彼らに合わせる顔がないと強く感じていたからだ。結局家庭教師を雇い、何もしなかった二年間を取り戻し、それだけに納まらず所謂“お受験”の為に超過の努力もし、そして県内で随一の私立進学校とレッテルを貼られている中学に進学した。それもまた、友人と同じ学校になどとても通う資格がないという事、そして、いつか目覚める妹の為に自分将来養う義務が　否、義務ではなく、彼女が目覚めたとき、少しでも良い兄で、良い環境で迎えたいと思っていたからだった。

驚いたのが、合格したその中学では美沙都と冬夜の二人がいたことだった。

「　　つと、危ない危ない」

次の停留所は病院というアナウンスを聞き、柩は慌てて下車ボタンを押した。そうしてまた、妹の眠る病院に到着した。

もはや完全に顔馴染みとなった医師や看護師に軽く頭を下げながら、妹の病室へと向かう。

相変わらず、その白い部屋には白い肌をした結衣が白いベッドに眠っていた。

可能性として、意識を取り戻す見込みは低い。過去、そう医者に言われた。目の前で眠る、白い肌をした百合の様に“弱る”結衣の現実はそのだった。まだあたたかいのに、いきをしているのに。それでもやっぱり、結衣は生きながら死んでいるという形容が一番合致してしまう。

丁寧に毎日看護師達がりハビリをしてはいるが、そんなのは所詮関節が固まらないようにというだけだ。所詮自分で動かしてないのならば、筋肉は衰える一方だった。

栄養も無論点滴のみ。脂肪も筋肉も薄くなっていき、まるで枯れ木のようになっていく。毎日欠かさず見舞いに来ている柩には、それが痛いほど、そして追って理解できていた。それが何より、柩の心を締め付けた。

あれから開くことのない瞼を見るたびに胸から何かが込み上げて来そうになる。だが、それを唾と共にいつも飲み込む。そうして体温の有る白い肌の細い指を握り締めるのだった。

出来る事は何もなかった。それは結衣の担当医でさえも。昏睡というのは、有る意味で対処の使用が全くない症状だった。

原因は精神性ショックのものだろうと告げられた。だがそれ故に、何も処置を施すことが出来なかった。あの日の傷はもう癒えている。しかしきつと、心の傷だけは今もまだ深く“抉った”ままなのだろう。

祈りとは、何と無力な行為なのだろう。

今、彼女は夢を視ているのだろうか。それとも夢すら見ることない“生き死人”なのだろうか。呼びかければ、応えてくれるのだろうか。

「結衣……」

けれども、握る指も閉じられた瞼も反応することはなかった。柩は独り白い病室で、胸の中だけで声を上げずに静かにまた泣いた。

どうしてこうなったのだろうか。彼女が何かしたのだろうか。神が居るなら、どうして彼女にこの役目が課せられたのだろうか。何か、意味があるのだろうか。意味すら、何もない理不尽なものなのだろうか。

だとしたら、何と言っ皮膚だろう。

/

「……聡、一ヶ月振りだね。一日遅れでゴメン。メリークリスマス」

しゃがみ込み、茜は弟の墓の前で微笑んだ。空から降る雨は聡を濡らしていた。自分が濡れるのも構わず茜は傘を墓  
さとし  
にも差した。

聡の前には既に花の一束が置かれていた。誰だろうか。両親か聡の友人か……何にせよ、まだ自分の弟が皆の心から消えていないことを喜んだ。

そうして暫くそのまま、刻まれた一之瀬聡の名前をただ見つめ続けていた。

「私さ……好きな人、出来ちゃったかも知れない」

不意にそう口を開いた茜は、言葉を紡ぐと共に困ったように苦笑した。

硝子の様な声で茜は続ける。

「まあ、人ってというか子かな。自分でもね、最初はそんなんじゃない

いと思ってたんだ。歳も離れてるし、全然かつこよくもないし……  
第一印象だって、うじうじしてて全然男らしくもなかったしね」

自分で言って何処か可笑しく、口元に手を当てながら語りかける。

「でも……優しいんだ。きっと、心から哀しい思いをしたから……」

頭に過ぎる七年前の悲劇的一幕。天国へと近づく塔は一転して地獄へ誘った。幾つもの死が生まれた　　聡の死が生まれた惨劇。

「それとね……何か聡に似てるんだ。顔が似てるってわけじゃないんだけどね……表情とか仕種とか、反応とか、雰囲気。でなんかさ、ずっとあの子のこと考えてるんだよね。最初は聡に重ねてるんだろうなって思った。でも多分ちよつと違う。確かに始めは聡と重ねて思っていたかも知れない。でも、今はきつとあの子個人を思ってる。ずっと一緒にいたいと思うんだ。恋とは、まあもしかしたら違うのかも知れないけど……いやでもあの時何故かイラッと来たからなあ……ううん」

顎に指を添え、数秒茜は唸り続けた。しかしその数秒後にあっさり「分かんね」と朗らかに笑った。

「まあ何にせよ、好きな人……大切な人であることは間違いないと思うんだ」

そこまで途切れ途切れに言い切ると、肘に掛けたバッグから一つの黒い箱を取り出した。そしてその中から、一つの小さな小さなペンドラントを取り出した。

「だから……こんなのも買ったのにな。家計は厳しいのでお粗末な



物ですが。　これね、モルセラを象ってるんだって。モルセラって聞いたこと無かったんだけど、花言葉が気に入ったから買っちゃったんだ。誕生石のカーネリアンもほんの少しだけど飾られて綺麗だったし」

そして屈んだまま、両肘を自分の膝に立て、両手で自分の頬を包んで、微笑みながら言った。

「モルセラの花言葉はね　“永遠の感謝” って言うんだって」

一息、茜は息を吸う。

「私、聡に感謝してる。たったの十二年間だったけどありがとう。感謝してる。だけど、聡の死……過去の悲しみからは私離れるよ。いつまでもうじうじしてちゃ駄目なんだ。前を向かなきゃ。どれだけ思っても聡は帰ってこないんだもの。もし、空から私を見てるならごめんね。でもあなたの気持は分らない。だって、死んじやつたんだもの。道徳観だとか、倫理観だとか、そんな聡から聞いたんじゃないもので縛られるのは嫌。嫌なの、重いものを抱えながら生きていくのは。ごめんね、私は弱い。そしてきつと、これは私のわがままだと思う。」

だけど聡の事は絶対忘れない。永遠の感謝は、ずっと胸に抱き続けるから」

ペンダントを墓の前で眩しく揺らして、茜はもう一度破顔した。

/

「 柩くん、時間ですよ」

「ん……あれ？」

看護師の声で柩は意識を取り戻した。上半身を起こされ、寝ぼけ眼を指で擦る。

「うわ、僕もしかして寝てました？」

「ばつちりと。それも仲良く手を繋いでね」

「うわ！ あ、いや、その……」

言われ、慌てて結衣から手を離す。何となくそう言われると気恥ずかしく、柩の顔は少し赤くなっていった。

「良いじゃないの。何だか見ていて微笑ましかったわ。ほら、結衣ちゃんも心なしか、喜んでるように見えない？」

「え？ あ……ほんとだ」

言われ結衣の顔を覗けば、気のせいかもしれないが、少し綻んでいるように見えた。淡く、目元だけが破顔している。安らかな寝顔だった。

「きつと、お兄ちゃんと同じ夢を見ていたのね……」

「そう、なのかな……」

彼女は夢を見ることすら出来ないのかもしれない。独りでは。

けれど、自分が傍に居れば、夢を見ることが出来るのかもしれない。手を握れば体温を分かち合えるように、一緒に居れば、心だつて。

「そうだと、良いな」

目に染みる何かを誤魔化す様に左手で口を覆うと、枢は軽く鼻をすすった。それを横で見る看護師が微笑む。

そつと近寄り、枢の肩に手を添えた。

「さ、日はもう沈んでしまいましたよ。これから、今日最後のリハビリがあるから。枢くん疲れてるみたいだし、今日はお帰りなさいな」

「あ、ホントだ。もう六時過ぎだ……」

荷と服を正し、一礼をして枢は妹の病室を後にした。

去り際に、妹の声が聴こえた気がした。そよ風に揺れる鈴のように澄んだ声で、お兄ちゃん　と。

「な、何でやねん……」

知れず、枢は携帯の画面を睨みながら零した。

帰りのバスが十五分遅れていた。訝しみ、携帯を開き運行状況を調べる。運行停止。空は星空とは言えないものの雲のない快晴。何でやねん。

仕方ない歩くか、と今現在に至る。

枢が徒歩を避ける理由はいくつかあった。無論ただ面倒臭い、時間がかかるという理由もある。しかし何より敬遠してしまうのは、道の途中に建っているところある廃屋だった。遠回りすれば極端に時間が嵩んでしまう為、道の関係で通らなければならぬ場所だった。

その建物の前で、枢は立ち尽くす。膝に痛みが走る。膝の付け根を静かにさすった。

聳える廃墟は枢の父が勤めていた会社だった。かろうじて三階まであるだけの小さな企業。何をしている会社なのかは全く知らなかった。何故か、父も母もあまり話したがらなかった。父は元より話す機会自体が希薄だったのだが。

今ではもう使われることはなかった。あまり良く知らない。知りたくもなかった。

これはどうしても父を思い出してしまう捨てられた廃墟。そしてそれと共にどうしても痛んでしまう過去の傷。それを掘り起こすものに他ならなかった。

「あ、れ？」

しかし、今日に限って奇妙だった。ここに来た時はいつだって何故か警備員によって固められていた。入ることは許されない。どという訳か、もう使われていない建造物が護られている筈だった。

だが、今は誰もいない。入り口を立っている人間も、敷地内を歩き回る人間も。

……いや、と被りを振る。そもそも既に不要なものに警備がついていたことが不自然なんだ。だったらようやく自然な状態に戻った。ただそれだけのことじゃないか。

痛む膝をさする手を止め、枢は立ち上がった。そして建物から視界を外し、踵を返そうとした直後。声が聞こえた。

「…………え？」

それはとても柔らかな音色だった。宝石の様に美しく感じるも、そよ風の様に優しい声だった。

しかし、何を言われたのかは思いだせない。耳に奇妙な感覚だけが残る。言葉もなく囁かれた。そんな奇怪な表現が合いそうだった。

思わず枢は建物を見返す。そこは相変わらずの静寂だった。ただ耳元に、言葉のない声を囁かれている感覚だけが枢を現実に繋ぎ止め、そして枢の意識を建物に引きつけていた。

「呼んで、いる……？」

眩き、枢はおぼつかない足取りで建物へと近づいていく。枢の意識には、建物と声しか残っていなかった。

そうして、枢は無人の廃墟へと入っていった。自動ドアを始めとする何故か生きている電気系統に疑問を抱かず、そして、建物の横で倒れる血の匂い塗れる警備員に気づかぬまま、臃いだ意識で迷い込んでいった。

ACT・002 ターン・アウト・ワーフェア(2)

薄暗く、埃漂う廃墟の中で枢は独り立っていた。虚ろな瞳はただ下を見続ける。まるで床と自らの足以外の何かがそこにあるかのよう。暫くの間、ただじつと枢は古びたロビーに立ち尽くしていた。しかし不意に、枢に振動が襲った。地震の様なそれは、地鳴りと共に枢のみならず建物全体を軋ませる。ふらつき、立っていられなくなった枢は地面に尻もちついたことで意識を取り戻した。

「な、な……え？      おわっ！」

訳も分からず顔をあちこちに降っていると、突然屋根から電灯が落ちてきた。咄嗟に床の上を飛び退き回避する。まさに危機一髪といった具合に、股の間に落ち、ガラスが飛び散った。

「うおお意味分かんねえ意味分かんねえ！」

四つん這いで汚れただけの床をかさかさと駆けまわる。

学校の先生が言っていた      地震の時はとにかく頭を低くして机の下に隠れると、そう枢は天を指差す気分で自分に言い聞かす。むやみに出ず、納まるのをその場で待て、と      いや、あれ、頭を低くするのは火事か？

足を止め首を捻った矢先、枢の隣でまた電灯が落下した。硝子の割れる音に肩を跳ねさせ、そのまま台所に出る黒いアレのように受付の机の下に潜り込む。そして更に二度、三度と揺れるにつれてまたいくつか硝子の割れる音が響いた。枢は頭を抱え、身を縮ませた。数度の振動が終わり、数秒経っても音沙汰はなくなった。

「だい、じょう……ぶ？」

恐る恐る、枢は頭を出しては引っ込める。拳句、まるで雨が降っているのか確かめるように手を出しては引っ込める。と、自分でやっていてこの動作に意味がない事に気づき、一人で咳払いしながら机の下から這い出る。

「さて、意味分からん訳だけど……まず、ここは何処？」

いまいち状況が分からなかった。病院から歩いて帰り、建物を見、誰かに呼ばれてからの記憶がない。ということは、ここは父の会社の中なのか。

心臓が締め付けられる。膝の付け根が痛む。動悸を手で抑えながら、枢は入り口まで歩いていく。何にせよ、ここで生き埋めなどにされては堪ったものではない。

だが、入り口のドアに手を掛けた瞬間に、目の前には僅かな振動と共に巨大な脚が降り立った。人工の肌を纏う巨人、鉄の装甲を纏う巨人、人型をした殺戮兵器。

「アウ、ラ……」

途端に動悸が激しくなる。骨に伝わり耳に響く其れは、あの時の心臓と極めて近い。

枢の意識にフラッシュバックする。七年前の悲劇。血塗られた劇場。ただ幸せの場であつたそこは、一瞬にして地の獄に陥つた。悲鳴が飛び交う、怒号がぶつけられる。響く銃声、眉間に開く穴。絨毯に染み渡る生暖かく鉄臭い真つ赤な水。砕けるヒトガタ、壊れるヒトガタ。そして血の沼で血の炎を纏いながら、笑う一人の男。

「いや、だ……」

枢の歯が小刻みに震え、それは音を鳴らしていた。動悸はもはや気にならなくなった。それどころではない。膝が痛み、震えていた。喉も渇き、目すら渇く。困難になる呼吸をどうにか整え酸素を補給する。そんな当たり前のことすら、今の枢には困難だった。

「いやだ、いやだ、いやだいやだいやだ」

自分を抱きしめ、震えを抑えようとする。しかし無駄だった。そんなもので枢の震えが納まる筈もなかった。

息を止め、下唇を目一杯噛むと、枢はその両目に涙を浮かべながら駆けて行った。何処へ何てものは本人にも分からない。ただあれより何処か遠くへ。それだけを一心に、無我夢中に逃げ出した。

/

「で、首尾はどう？」

『状況は不利。先手を打たれた。対象を持つての撤退より、対象を持つての排除を優先させられた。現在逃走中』

「……大丈夫なの？」

『逃走に問題はない。敵は機体が不慣れなせいが操縦は荒い。それにOSが古いのかマップピングシステムが搭載されてないらしい。ただ……』

「ただ？」



『装甲が桁違いに厚い』

そのインカムから聞こえた声に、優紀は唇を結んだ。やはり、こ  
うなった以上一対一での捕獲は難しいようだ。少々手荒だが……。  
腹這いに伏せる優紀は遠方照準器から遠くの窓を覗き見る。異常  
なしと判断すれば、即座にスライドし別の建物へとまた視界をやっ  
た。

「了解、こちら準備しておくわ」

『了解』

「気をつけてね」

『了解』

/

「やばい……ほんと何処だ、ここ」

真っ白だった意識が戻った時、枢は自身がどこにいるのか全く分  
からなかった。無我夢中だったため、途中経路などさっぱりである。  
周りを見渡しても薄暗く、埃っぽいだけ。そもそも学校に然りデ  
パートに然り、その建物に親しいものでなければ景色がほんの少し  
違うだけであり位置の区別がつかないものだ。

全力疾走のせいで荒い息のまま、先ほどとは違い酸素を取り入れ  
る為に高鳴る心臓を持ったまま、ぐるぐるぐるすると視界を這わし  
ていた。ところで、またも地震と寸分違わぬ振動が来る。だがや

はり奇妙だった。振動が大きい割に以上に時間が短い。

それに何故だろう。瓦礫の崩れる音や建物の軋む音に紛れて……爆発するような音が聞こえる。

いや、それが何だろうがとにかく此処を一も早く出ること、それが最優先なのは変わらないと被りを振る。

目が慣れてきたとはいえこう暗いままでは探すものも探せないの  
で、携帯を取り出しライトを点ける。電池の消耗が早いので気をつ  
けなくては。

点けた瞬間、舞う埃が視覚的に分かってしまい、思わず咳き込ん  
だ。

「くそ……ごほつ、最悪だ」

止まらない咳きを出す口に手をやりながら、歩いていく。ライト  
をあちこちに照らしていると、不意に見つけた。うつすらと照らさ  
れたそこには何故か開いたままのエレベーターがあり、その横の壁  
には案内図らしきものが掛けられていた。

しめたと枢は走っていく。案の定それは地図が書かれていた。ご  
丁寧<sup>ご</sup>に現在地も記してくれている。携帯のカメラを取り出し、その  
地図を写真に収め、

「……よし」

そのまま踵を返そうとした途端に、またも建物全体が地響きを上  
げた。爆発音と共に。転びそうになり、枢は屈み右腕で自分の体を  
支える。

不意に、みし、と冗談みたいな音が聞こえた。上に明かりをやれ  
ば、天井には馬鹿みたいに大きい罅<sup>ひび</sup>が生まれていた。

「い!？」

それは一瞬で巨大化していく。振動は納まっているが、あぁなっ  
ては自重で“雪崩れて”行くのだろう。

「やばっ!？」

咄嗟に前へと転がっていく。小学生の時にやった器械体操の様に  
前転で。ただ、勢い余り壁に背中をぶつけてしまう。

前転が止まった樞がかつて自分がいた場所をみやると、そこには  
巨大な瓦礫が落下していた。それは自分の体の二回りも“三回り”  
も大きく、凡そ巻き込まれては一溜まりもないだろう。

樞の背に冷や汗が垂れる。だが、なんとかかわすことが出来た。  
一息安堵すると今度は、がこん、なんてエレベーターの扉が閉ま  
り始める。

「え？」

慌てて起き上がり扉を止めようとするが一步届かず、無情にも扉  
は閉まってしまった。そして樞の体を包む浮遊感。明らかにエレベ  
ーターは下階へと向かっていた。

止めるため、エレベーターの階上ボタンにライトを向ける。

「下、に……?」

ここは一階だ。エレベーターは下に向かっている。だが奇妙な事  
に、先ほどの案内図でも見たが、この建物には地下など存在しては  
いなかった。

その事実にも、ま、樞は少し茫然としてしまった。エレベーター  
の停止する振動で我に帰る。階数表示を見る。地下5階。

ここに居ちゃ危ない、とにかく戻ろう　と1階のボタンを連打

して、上に上がるボタンも連打するが全く反応がない。手入れしていないからか振動からか、とにかくにもかくにも故障しているらしい。どうも諦めて降りた方が賢明なようだ。

「……最悪だ」

舌打ちと共に思わずごちる。不明の非常事態に巻き込まれた上、エレベーターが停止し使用不可。

嘆く枢に追い打ちを掛けるように、もう一度建物が揺れた。全身で振動を感じる。震えで鼓膜が破れそうだ。もしかして、爆心地に近づいている……？

身を包む状況に心臓を掴まれる感覚を覚えながらも、枢は揺れの収まりを図って立ち上がった。とにかく、逃げなくてはならない。

どうするか。さっき撮ったものは一階のものだった、この階の地図はない。だから地理が分からない。

ふと携帯見る。

「……くそ、圏外か」

地下だと電波の入りが悪いのかも知れない。

「くそっ」

もう一度毒づき、枢は足を動かし始めた。とりあえず手当たり次第歩くしかない。

痛む膝を我慢してでも、自分は死ぬわけにはいかない。彼女を結衣をこの世界にたつた独り残す訳にはいかないんだ。彼女の笑顔を見る為なら、意地汚く生にしがみつく。

……非常用の階段ぐらいはあるだろう。そう腹を括り、枢はエレベーターを飛び出した。

だが、右へ曲がり左へ曲がり左へ曲がり、歩けど歩けど、階段らしきものは見当たらない。

そして不意に、地面を滑る独特なローラー音が聞こえてきた。ガラガラとも、何とも表現しにくい音だった。それと共に、地面が小刻みに振動しているのを足の裏で感じる。

「何だ……」

だがその音は何か家具を動かしたような軽い音ではない。また、反響しているせいでその正体も、距離も分からない。確実に言えることは恐らくとんでもない重量だろうということ。決して軽快な音ではなく、籠った押し潰された音。これは、まるで後ろを振り向き、ライトを照らす。

「な!？」

そこにいたのは【アウラ】だった。まるで犬の様な外見をした殺戮兵器。そのボディは灰色で、天井に埋め込まれた蛍光灯を爛々と反射していた。

俗称一【ドッグス3】 典型的な、無人の、警備用アウラだった。そのカメラアイで発見した侵入者を問答無用で攻撃する、単調動作のAI搭載型の無人アウラ。外見は犬のよう いや、その威圧感も狼とも取れる。両肩の辺りにガトリングが内装。全長は凡そ5メートルかそこらで、武装は最低限しかない。複雑な動作も出来ない。対象を発見、或いは自身の装甲が傷ついた場合にネットワークを介し、連絡を取り合うもの。実に機械的だ。けれど 人間である枢にとっては死神に等しい存在だった。

その赤のカメラアイが点滅している。まるで、獲物を吟味しているかのように。

枢の瞳がその赤の光を受けた途端、弾けた様に走り出した。それ

は恐怖から出る反射的な行動だった。あの黒光りする銃口から吐き出される巨大な鉛玉がたった一発でも掠りさえしてしまえば自分は……。

目の前に“あの”地獄がチラつく。

いくら最低限の武装とはいえ、それは「アウラ」の中での枠組みだ。マシンガンを乱射されたら、たかが人間である枢は太刀打ちできない。勝ち目など万に一つもない。生きる為には 痛む膝を酷使して走らなければならない。

顎を上げて、酸素を求める肺を抱えながら枢は全力で走る。だが当然、アウラも追ってくる。

逃走を早期に実行したのが幸いしたのか、まだアウラの姿は見えていない。

左へ曲がり左へ曲がり左へ曲がり左へ曲がる。優に500メートル

いや、1キロは走っているだろう。短距離の走り方をしたので息が上がっている。そして、膝の痛みが増して来ていた。

これ以上膝に負担を掛ける訳には。そう思うが、脚を止めることは許されない。今でもドッグス3は追って来ている。後ろを向いても姿は見えないが、角を曲がれば直ぐにあの兵器と対面できる筈だ。とにかくドッグス3から逃げなくては。そうしなければ膝の痛み、それ以上の痛みが待っているのだ。先へ先へと走り続ける。

やがて、目の前に扉が見えた。自分と等身大ほどの扉。左右首を振っても他に道はない。後は論外。つまりはこの扉を開ける他選択肢はないのだ。

枢は駆け寄る。そして扉に手を翳すが、当然のように反応などしない。これを潜れば、あのアウラを振り切れるというのに。

「近くに、何かスイッチは……！」

ライトを扉の周辺に撒き散らす、何も見当たらない。あるのは無機質な深緑の扉だけ。まさかもこの扉は機能していないのだろ

うか。ここは既に見捨てられた施設だ。もしかしたら、所々に既に機能していないトマソンがあるのかも知れない。それはつまり、この扉は開かないという事だ。

「何とか、しないと……」

呼吸によって落ち着かない肩で枢は一人確認するように呟いた。

「どうする？ どうする？ どうする？」

そう呟きながら思考を巡らせようとするも、五月蠅い心臓の音に急かされ、まるで要領を得ない。扉を睨み付けるだけで、何も明確な案は浮かばない。そしてそれがまた、枢の気持ちを宙に浮かすように落ち着かなくさせる。実際には数秒にも満たない逡巡だろうが、枢にとってそれは致命的な数分にすら感じてしまう。

反響する音は大きくなっている。足に伝わる振動も大きくなっている。その音の発信源を脳裏に浮かべた途端、枢の背筋から温度が失われていった。

あの重厚な金属装甲が嫌だった。反射する禍々しい光が恐ろしい。あの兵器が作られた思想がおぞましい。兵器というものがまさに畏怖を具現したものだと思えた。その中でも特にアウラが、怖かった。一瞬、自分の未来を想像してしまった。

「クソッ！ 開けよ！ 開いてくれよ！」

扉をただがむしゃらに叩く。助けを求める為に。自分の未来を否定し、粉々に砕きたいが為に。

だが当然、そんなもので現状が何も変わることはない。それでも、恐怖に駆られた枢にはただ餓鬼の様に拳を振るうしか叶わなかった。今更気づいたのだ。如何にこの現状が絶望的であるかということ、

今更思い知った。重厚な廠鉄の反響音を全身で浴びて、振るわす床から響く恐怖のそれを肌で感じ取って、漸く。

「開けてくれ！ 僕を、僕を誰か助けてくれよ！」

麻痺していたとしか思えなかった。本来ならばあそこで諦めるべきだったのだ。ドッグスを初めに見た瞬間に。アウラから逃げ切る？ 不可能だろう。脚の差は埋め様もなく絶望的だ。殺傷能力も防ぎようもなく絶望的だ。兵器を持つてすらアウラには人間は叶わない。RPGを使ったって人間がアウラを御し得ることなど叶わない。ロケットランチャーあの時、あの赤の光を余すことなく浴びて、侵入者として認知され、大人しくコロサレルべきだったのだ。

「嫌だ」

身震いと共に口から零した。死ぬ？ 嫌だ。そんなものは嫌だ。自分もまた “父さん” や “母さん” と同じ目に遭わなくてはいけないのか？ 妹はあれのせいで眠ってしまった。あれを見たせいで。あれを自分も味わらなければならないのか？ 自分の身長以上もある鉛玉を全身に受け、四肢が飛び散り、辺りに赤い血を撒き散らす、あれを。一度見ただけでは終わらず、今度はあれを体験させるといふのか。

何故自分はこうも奪われるだけなんだ……？

「誰か……助けてよ。父さん……！」

もう一度、結衣の笑顔を。死ぬのは怖い。誰でも良い。この現状から救い出してくれ。あの鉛玉に撃たれるのは嫌だ。怖い。怖い。死にたくない死にたくない。

助けて、助けて、と。扉を掻き毟りながら、柩は膝を着いた。現



実を放棄。思考をシャットダウン。対処の術はない。希望の光はない。

「いやだ、このまま死ぬのなんていやだ。誰か、誰か、助けてよおおおおおおお！」

瞬間、枢の身体は吹き飛ばされた。突然だった。訳も分からず、枢は全身を強張らせて衝撃に耐える。破壊され飛び散る壁の破片と共に、枢はごろごろと転がっていく。

打撲し痛む感覚に目を絞りながら、枢は顔を上げた。腹這いに横たわり、両手の肘で上半身を反る今の状況は、まるであの地獄の焼き増しの様だった。

目を絞って見た光景には、巨大なヒトが立っていた。人ではない、ヒト。鋼鉄の巨人、アウラだった。ドッグスではない。脚部が二本脚の疑いようなない人型だ。全身は薄黒く、余分なデザインは見受けられない。その厳律とした様は騎士の様な印象を抱かせる。

「な、んだ？」

それがアウラだと認識した直後には、目の前に殺される結末を脳裏に描いていた。

だが予想に反し、次の瞬間、目の前にその黒い巨大な手の平が伸ばされた。それは嘗て枢が父親に望んだモノ。救いの手を彷彿とさせる様だった。その手に危害を加える意思は感じられず、ただ乗れという意思が感じられる。

『早く』

「え？」

『早く乗って！』

聞こえて来た声は少女のそれだった。ノイズが混じり、はつきりとは分らないが、幼く感じる。

もう一度、早く、と急かされる声に弾かれ、柩は起き上がり手の平へと駆けて行つた。最早藁にも縋る思いだ。例え救いの為に伸ばされた手がアウラの物であろうとも。

その冷えた金属装甲の上に乗った瞬間、指が動き、柩の身体を包み込むように軽く握られた。持ち上げられる浮遊感に対し、掴まうて耐える中、本当に自分を護るつもりらしいことを感じ取った。

『掴まうて。必ず、必ず助け出すから』

先ほどとは打って変わって、感情の薄い声。捲くし立てた声が嘘のようだが、確信に近いほど、掛けられた声には少女の想いが伝わった気がした。

アウラの駆動音を聞きながら、握られた指の隙間から、仄暗い中光るアウラの緑瞳<sup>りょくどう</sup>をただ見つめていた。

ACT・002 ターン・アウト・ワーフェア(2) (後書き)

ノボーイ・ミーツ・G

枢の視界に移ったあれは、台所に出没する黒いゴキ。

「いやだ、いやだ、いやだいやだいやだ」

自分を抱きしめ、震えを抑えようとする。しかし無駄だった。そんなもので枢の震えが納まる筈もなかった。カサカサと這いまわる足音、黒光りする甲。何より、あれが飛ぶ何てことを考えると気が狂いそうなほど身の毛がよだつ。

息を止め、下唇を目一杯噛むと、枢はその両目に涙を浮かべながら駆けて行った。何処へ何てものは本人にも分からない。ただ“黒いあれ”より何処か遠くへ。それだけを一心に、無我夢中に逃げ出した。

## ACT・002 ターン・アウト・ワーフェア(3)

少女は目の前に在る巨人に対し、苦戦を虐げられていた。

元より、現在の戦場は狭い通路だ。機体が弾丸の享受を最小に抑える回避優先の高機動型だろうと、衝撃を受けて尚それを跳ね退けて有り余る力を見せつける愚鈍な重量型だろうと、そんなものは最早関係がなかった。所詮は十分に動き回れるスペースなどない。瞬間移動を二度行えば、それは既に壁へと激突してしまう位に。

眼前から迫る太いレーザーを紙一重で回避する。正に刹那の差であらう。銃口に備わる光量が臨界まで膨れ上がるのを待ち、その発散のタイミングを予測し、側面のブースターを瞬間放出する。早々出来る物ではない。既にそれは相手が銃のトリガーを引くのを見て回避する。いや、むしろマズルフラッシュを認識してからという領域なのかも知れない。何にせよ、この所業は凡そ人間が成し得るものではない。ものではないのだが。黒い巨人に乗り込んだ少女は既にそれを四度ほど行っていた。

狭い通路に、それを三分割した程の直径を備えた光の柱。それが空間を四度突き刺し、少女は全てにおいて接触を免れていた。

だが無論、驚異はそれだけではない。

「またそれかつ……！」

圧倒的なミサイル群。狂ったように零される飛来兵器の数は通路の輪切り面積など即座に埋め尽くす。壁の様に迫るミサイルをマシンガンで対処しつつ、ブースターでスライドして後退する。それを既に数分繰り返していた。

少女は目の前の爆発を捉えつつ、視界の端にあるマップモニターを垣間見る。電磁波を発生させその反射波を測定し、即席でマップピングするシステム。多少爆破に伴う電磁波の乱れでぶれるものの、

周りを見渡す暇がない現状では収益の大きい情報だった。

「……もう限界か」

二度、空間をなぞる様に円を描いたマシンガンをリロードしつつ、背後の壁までの距離を認識。トリガーの前方に装着されていたマジン部分が音を立てて床へと落ちた。

黒轍の巨人 【プロセルピナ】はスライドしたまま僅かに腰を落とした。直後に、背後に備え付けられていた四つの“筒”が前方へと向く。二つの筒が縦に重なったそれが二セット。それは孔が空いていた。その奥にはそれぞれに一発の弾頭が潜んでいた。

ミサイルの誘爆爆風が収まると同時に、未だレーザーライフルの次弾装填が終えていない敵機は、再度ミサイルを濁流の様に零した。そしてタイミングを待ち望んでいたかの様に、筒の上部がそれぞれ振動した。白煙を巻きながら、灰色の弾頭は空間を飛来し、迫るミサイル面と激突した。

いわばロケットランチャーだ。ただしそれは人間が扱うようなRPG-7などと言った“ちゃち”な物では到底ない。その一発の威力は、母艦潜水艦が扱うトマホークミサイルに似通ってすらいるだろう。

当然、爆風は起こる。まるで二つの爆発が侵食し合う様に広がり、前方の視界という視界は爆風に包まれた。

それを一瞥し、プロセルピナは即座に緊急旋回し背後へと振り向く。そこには壁があった。行き止まり。恐らくはゲリラ対策と言った所だろう。現在いる施設にはこういった何も無い袋小路が多々あった。少女はその度に 壁へと背負う弾頭をぶつけていた。そしてそれは今度も変わらない。

岩盤を容易に砕くミサイルによる、四度の連撃。リロードし熱が抜けきる前に発射する強引なそれ。続けざまにくらう衝撃に、壁は耐えられるはずがない。

重音を響かせながら崩れる壁にプロセルピナはスライドしていく。巻き上がる煙を抜け、進むべき方向を定めるべく左右を見渡すと

「何、で？」

そこには一人の少年が倒れていた。

周りには碎けた瓦礫が飛び散っている。砂も然り。少年の全身はそれを浴びている。床に赤い滴りがあることから、少年は傷ついているのだろう。何故か、何て事は考えなくても分かっていた。

少年ががくがくと全身を震わせながら顔を上げた。腹這いに動くその姿は、酷く弱々しく力がなかった。そして、向けられた瞳。そこには暗く重い、恐怖という念が籠められていた。それを証明するかのような、燦った光。

「ッ」

あの瞳は嫌だ。死に脅えた目、その物だ。嘗て自分が見ていた瞳。そして嘗て 自分がしていた瞳。

『早く』

気づけば、少女は巨人の手の平を少年へと差し出していた。

「え？」

『早く乗って！』

自分はあるな瞳を向けられるためにプロセルピナに乗っている訳ではない。むしろ自分は、あるな瞳が嫌だから、殺戮兵器こんなものに乗って

いる。

『必ず』

少女は固くトリガーを握り締めた。

『必ず助け出すから』

少女は目の前に迫るドッグスを見据えながら、決意を持って語りかけた。

/

「は？ 子供を拾った？」

優紀はインカムから聞こえる言葉が信じられず、思わず訊き返していた。しかし再度幼い声で言われた内容は、聞き間違いではなく、やはりその信じられない内容だった。

いつ自分が見逃していたのか、そんなことを思い返せば幾度か狙撃位置変えていた。一分にも満たない移動時間だが、十中八九その時だろう。元々この作戦は穴だらけなのだ。対象が見つかった瞬間に偶然現場近くに居合わせた人員で駆け付けた。そう言っても過言ではないほどだ。

既に十年近くも追い求めた“宝箱”。それを手に入れる為の作戦を綿密に練らないというのは引つかかる所ではあるが、先を越されては話にならない。現に、相対する存在とはタッチの差で負けてしまっている状況なのだから。

優紀は腹這いに地面へと伏せたまま、耳に掛かる髪を掻き上げる。

「で、状況は？」

静かに呟いた。

『逃走を継続。それと同時に少年の保護、対象の捜索を行っている』

難儀だ、と態度に表さず嘆息した。

優紀の黒瞳が、手に持った狙撃銃の青く光るスコープを覗き見る。移るのは建造物の窓。一点をじっと眺めては、何も異常が無ければ、見切りをつけて他の地点へとスライドさせる。

『そっちは？』

「粗方。肩に叩き込んだから少なくともまともな狙撃は出来ない筈ね。まあ、アンチマテリアル対物だから掠っただけで片腕くらい吹き飛んでると思うけど、念の為警戒中。そっちこそ、大丈夫なの？」

『逃走に問題はない。あの機体は型が旧いからマッピングシステムが搭載されていない、確信出来た。だから逃げることで自体は容易。けれどそれも時間的な意味では限界がある。……包囲の完成は？』

「私とイリウムはすぐに出れるわ。ただ包囲は少し時間が掛かる……まだ【ユスティティア】は海洋の真っ只中ね」

『……分かった。ユーコとイリウムだけで良い。今から300秒いや、340秒後にE・E・（エクステンションエレクトロニクス）社から撤退する』

「ルートは？」



『2』

「了解。しつかりね」

『了解』

優紀は音声の途絶えたインカムを指先で撫でた

「だそうよ、イリウム」

『了解した。……へっへ、市街戦は久々だね』

「一応言っておくけど、被害は」

『最小限に、だろ。そんなの分かってるさ。じゃあ、オレはとつとと待機させて貰う。獲物を温めなくちゃならないんでね。んじゃ、いつもの布陣で宜しく』

そう、相変わらずの乱暴な言葉遣いが女性の声音で投げられた。目を細め、背後の気配に目をやった。暗がりのそこには、血だらけの腕をぶら下げた何者かがいた。残った片腕で拳銃を握り、汗の滲む顔を歪めて優紀を睨みつけていた。その眼光だけが闇の中彷徨い、荒い息が暗闇を掻き乱していた。

「もうここも限界か……」

通信が切れると同時に、優紀は狙撃銃を放り横に飛び退いた。銃弾は、彼女の右腕を掠めていった。

通信を終えた少女は、目の前の敵に意識を巡らせた。

目の前の、真っ白な通路の上には駆ける数機のアウラ。犬や狼を  
思わせる四つん這いのフォームは、左右に体を移しながら、確実に  
近づいてくる。だが、こちらも前進の足を緩めるつもりはない。

足の付け根からガトリングの口が現れる。鈍色の筒が六つ。それ  
が左右で計二つ。その銃口一つ一つから、一体秒間幾つの鋼鉄の雨  
が降り注ぐのだろうか。

少女の耳に被熱源捕捉のアラートが響いた瞬間、プロセルピナの  
右側面は爆ぜていた。一瞬で数百トンの巨体をシフトさせる瞬間移  
動。それは、ドッグスのロックオンなぞ容易に外せる偉業。<sup>ステッ</sup>

ずれた銃口が補正される前にプロセルピナの持つ銃口は閃光する。  
赤熱する弾丸は、着弾したドッグスの装甲を容易に拉げていく。

だが、幾ら容易にといってもドッグス一機を破壊するには数十発  
以上、更に言えば、数秒は掛かるということだ。それ自体は然した  
る問題ではない。両腕が健在であるのなら。今、片腕は少年の  
命を抱えているのだ。使えるのは右腕のみ。そうなれば、視界の端  
から更に迫る三機のドッグスを捌く上では致命的なハンデである。  
複数の敵の前で、攻撃が一点にのみ集中してしまふ。それは末恐ろ  
しいことであり、覆せない劣性である。

だが少女は、そのことに対してろくに懸念してはいなかった。  
ドッグスのガトリングが閃光する。空間に鉛玉を吐き出させるか  
どうかの刹那、プロセルピナのブースターは既に役目を終えていた。  
嘗て数瞬前にいた座標へ弾丸が撃ち込まれる。当たらないそれを、  
少女は冷静に見送っていく。僅か、数メートルスライドしただけ。  
だが見切れば、それだけの回避で十分過ぎる。

プロセルピナは、ドッグスの銃口が修正し終わる前に、既にステ

ツプを行使。次いで、更に二度。稲妻の様に迫るプロセルピナを、所詮無人であるドッグスに捉えられる訳はなかった。

狭い隙間を縫うように、プロセルピナはドッグスの背後を取った。そしてそのまま、鋭利な銃口を僅か後ろに振り被る。プロセルピナの脚部がブレーキの為にけたたましく火の花を咲かせる。プロセルピナの緑瞳が煌めいた。ドッグスがようやく標準を直した時には、プロセルピナの持つ銃口はドッグスの装甲を貫いていた。

煌めく緑瞳がスライドする。ドッグスを一瞥すると、プロセルピナはまたもそこから消失していた。弾丸を放つ為に回ったドッグスのガトリングは空振りに終わる。再び探し始めた時には、既に弾丸は装甲を打ち砕き機能停止。プロセルピナはそこで進行方向を修正し、奥へと向かい始めた。

最後に残った一機は、がらがらと音を鳴らして突破された方向へと振り向く。そこには、後ろ向きに進行し、ドッグスへと両肩のグレネードを向けているプロセルピナがいた。それをドッグスが認識した数瞬後には既にドッグスのカメラアイは爆発と共に破壊されていた。

「とんだジェットコースターだ……」

枢は、その巨人の右腕の中、吐きそうになっていた。

/

「さあ、もう逃げられないわ。その傷でよく戦ったものよ」

目の前の男の右手首を折らん勢いで握り締めたまま、優紀は背中に銃を向ける。背中に圧しつける、なんて真似はしない。素人であ

るならば威嚇として有効だが、相手が手練であるならそれは無意味に銃の位置を示している事に変わりない。

男はゆっくりと残された腕を上げ、降伏の意を見せる。

「……で、今日は何名様のお出ましのかしら？　今のところアウラの姿は見えないけど……いや、ちょうど来ているみたいね」

長く流麗な黒髪の間髪から妖しい瞳を覗かせながら、男の耳元でそう囁やく。魅惑的なものではあるが、今の男にとっては恐怖観念としか受け取れないだろう。

「……どうなの？」

口を割らない男に業を煮やし、掴んだ右腕に銃弾を一発撃ち込んだ。乾いた銃声は男の呻き声にかき消される。だが、叫びはしなかった。血が滲むほど唇を噛み、堪えていた。

「あら、素敵ね」

「るかよ」

「……何？」

「喋るかつつてんだよ！」

そう叫ぶ男の目は異様にぎらぎらとしていた。目の下にも大きな隈があり、まるで“何か”で決めているかのよう。

につ、と男は奥歯を見せる。そうして上顎を開き  
。 自決か！？

優紀は咄嗟に男を蹴り飛ばし、更に自分も後方へ退く。吹き飛ん

だ体勢を整え、男に警戒の銃口を向ける。狭い部屋の中、男は背中が壁に叩きつけられていた。だがその途端に……“爆発した”。優紀は顔の前に手をやり、爆風や破片に備えた。

辺りに肉片が飛び散る。その内の幾つかは優紀の腕に当たり、そして顔にもひっかけていった。優紀の体全体は“なまあたかい”感触に包まれていく。

一瞬で、陰気臭かった部屋は鉄の匂いで充滿した。戦場で良く匂うそれにそっくりだった。

「……奥歯に仕込んだ自決用の爆弾、ね」

眉間に皺を寄せ不機嫌を露わにしながら、優紀は独り呟いた。威勢が良いのは、奮起させる為の自分への鞭だったか。

不機嫌の対象は、情報を得られなかった事、そして、また命が一つ喪われてしまった事だった。

/

「っあ……吐きそうだ」

それは乗り心地最悪の特等席だからというのと、過去の心傷トラウマとの両方から来るものだった。身体と精神との両方から攻める絶叫マシンなど、良い性格にも程がある。

枢にとってアウラそのものが開けてはいけないブラックボックスのようなものだった。脳を掻き乱し、呼吸を止め、心臓を圧迫する脅威に等しい。枢は日常からそれと向き合っていた。当然だ、アウラは警備としてそこらかしこに居るのだから。だから膝の痛みは断続的だった。

数年前に革新された技術によって、彼らアウラの小型化軽量化高機動化に成功した。成功してしまったから、街中を容易に歩けるようになった。その革新された技術だって、兵器以外にも活用の方法はあるだろうに、やはり兵器以外の活用は二の次なのだ。

自分はアウラに触れている。自分はアウラに命の脅威に晒されている。自分はアウラに命を預けている。吐瀉としゃしそうだった。

深呼吸する。しかしそれで心は落ち着いても、振動は変わらずあった。

膝が痛む。

『もう少しだから。絶対、助けるから……』

時折、この巨人からそんな声が聞こえた。だからかもしれない。吐かずに済んでいるのは。

安心するとまでは言わない。何せ相手は正体の知らない誰かだし、何よりこんな大量殺戮の道具を操っている人間なのだ。それでも、この少女らしき声には、優しさ懸命さが込められている気がした。

『熱源……しまった、先回りされた……！』

不意にそう叫んだかと思うと、前方の壁に突如穴が開いた。がらがらと瓦礫を吐きだすその穴は、とても巨大。そう、それこそアウラが通れるほどに。

次いで瓦礫を吹き飛ばして現れたのは、枢が今まで見たことのない、酷く巨大で禍々しくも神々しい 純白のアウラがいた。

『【ネファイル】……！』

その声を皮切りに、純白のアウラの背後から大量のミサイルが雪崩れて行った。

ACT・002 ターン・アウト・ワーフェア(3) (後書き)

【ACT・002 ターン・アウト・ワーフェア(2)】より

/ エ アンゲリヨン

「いやだ、このまま死ぬのなんていやだ。誰か、誰か、助けてよお  
おおおおおお！」

瞬間、枢の身体は吹き飛ばされた。突然だった。訳も分からず、  
枢は全身を強張らせて衝撃に耐える。破壊され飛び散る壁の破片と  
共に、枢はごろごろと転がっていく。

打撲し痛む感覚に目を絞りながら、枢は顔を上げた。腹這いに横  
たわり、両手の肘で上半身を反る今の状況は、まるであの地獄の焼  
き増しの様だった。

目を絞って見た光景には、巨大なヒトが立っていた。それは可憐  
な少女で、薄い青い髪をした少女だった。

「 な、んだ? 」

それが綾波 イだと認識した直後には、保管されおめでとうする  
結末を脳裏に描いていた。

だが予想に反し… (以下略)。

「くそ……！」

片腕しか使えないというのは想像以上のハンデであった。

いや、格下の相手であれば“それ”はハンデであるが、同等或いは格上の相手に対して“それ”はただ強烈なデイスアドバンテージという要素に切り替わる。

敵機の装甲は未知数であった。敵機の武装は未知数であった。

所詮は汎用的な意味合いの強いマシンガンやグレネードでは、その正体不明の兵器相手では臨機応変に立ちまわるしかない。

が、臨機応変というのは自分が様々な選択肢を取れる状況下にあることが絶対だ。少女は今、片腕が塞がっている為に臨機応変というのは難しかった。まるで、常に相手を見上げている様な精神状態だ。

それでも、少女は手の中に包み込む少年を優先させていた。常に左手の中は胸の間で隠すように保たれている。それが酷く、動きにくい。

敵機のレーザーライフルが蒼く煌めく。その瞬間に少女はレーザーライフルの銃口目掛けてマシンガンを撃ち放つ。

危険は重々承知。だがこうでもしなければ、敵機に動揺など決して生まれないのだ。

十数発浴びた所で蒼い光は途端に消え失せ、レーザーライフルを背中に隠す様に背後へとやった。

直後に、僅か腰を落とし肩部のミサイル発射口を開口させる。それも再びマシンガンで撃ち狙う。

的が小さく流石に直撃はしないものの、それでも敬遠にはなり、ミサイル発射口は閉められた。

当然だろう。弾丸が幕を張っている中ミサイルなど発射してはそ



の途端に撃ち落とされ、自身が爆風を浴びるのだから。乗りなれない機体でも“良識”のあるパイロットであればその程度は判断できる。

ただ、こんなのは現状打破の戦術には全く成り得なかった。

向こうは攻撃態勢を取り止めるだけだ。こちらは弾丸と、いつまたあの無人セキユリティアウラが現れるかという事に脅えなくてはならない。

どうする？

少女は必死に策を巡らすが思いつかない。知らず歯噛みする。敵機の武装が豊富でないことがある意味では幸いしている。

どういつ設計思想なのか知らないが、殺傷能力は皆無に等しい動作停止を促すミサイルと薙ぎ払うだけの大鑑巨砲のレーザーライフルでは偏り過ぎ。あの装甲さえなければ、少女にはあの純白の巨人を容易く落とせる可能性すら大いにあるほどだ。

だが、現実はある装甲がある。

そして、パイロットも冷静だ。このまま行けばどちらが倒れるかわかって、こんなじり貧の戦闘に付き合っているということ。

もう一度、少女は歯噛みする。

仕方がない、撤退だ。

そう意を決め、出口へと向かう為に反転すると、その視界の遠方……曲がり角から不意に、ドッグスが二機現れた。

「こんな、ときに……！」

予想していた事ではあった。だが、現状に毒づかずにはいられない。

少女は浅く息を吸った。

前方へ瞬間移動する。そうしてそのまま半回転した。

右腕を水平に伸ばし、銃口を巨人に向ける。再びレーザーライフルを充填していたそこへ容赦なく叩き込む。

光が止んだ。

左の視界ではドッグスのガトリングが回り始めていた。半々回転する。僅かに腰を落とした。

右肩部につけられたグレネードの発射口が開き、ドッグス諸共その奥の壁を突き破った。そのままの体勢で、もう一度間髪いれず振り返る。そこには再びミサイルを展開せんと構えている巨人がいた。今度は左肩部のグレネードを発射する。純白の巨人は橙色の爆炎で姿は見えなくなった。ミサイル発射の有無は、分からない。

その間、枢が二息吸い終わるかどうかの間だった。まさに、一瞬である。

新しく出来た逃走路へとプロセルピナは飛びこんだ。そこに、真横から肩部の単分子ブレードを展開していたドッグスがいた。

「な  
」

刹那、ドッグスはプロセルピナを　灰の刃はプロセルピナの左腕を掠めていった。

装甲が抉られる。神経系統が切断された。左手の五指の機能停止。現在の状況、確認出来ず。

「しまった……！」

『左腕神経接続系統にエラー発生。予備神経疎通<sup>シナプス</sup>に切り替えます』

数瞬後に確認出来た五指は、完全に“開かれていた”。

「あの子は……！」

プロセルピナは左右に視線を這わす。だが少年は見当たらない。その隙について、ドッグスはガトリングを浴びせた。その弾丸の

直撃によりプロセルピナの装甲は剥げていく。

舌打ち、プロセルピナをドッグスへと振り返りさせた。

そして銃口を合わせた所で、あとトリガーを引けば墜とせるとい  
うのに、止まってしまふ。それは少年が爆風に巻き込まれてしまふ  
のではないかという懸念からだった。

その止まった一瞬は、またもプロセルピナに弾丸を喰らわせた。

一弾倉分を丸々受け、プロセルピナは思わずバランスを崩してし  
まう。そこへ、間髪いれずにドッグスは飛び掛かってきた。

その様は、まさにヒトへ襲いかかるオオカミそのものだった。

たたらを踏んでいたプロセルピナはそれで完全にふらつき、地面  
と倒れてしまふ。そうして倒れたプロセルピナに止めを刺す様に、  
頭部の先端からまたも単分子ブレードが生えてきた。

それはまるで、牙だった。

「調子に、乗るな……！」

“喰い掛かる”ドッグスの首根っこを回復した左手で驚掴み、顎  
へ銃口を押しつけ、そのままトリガーを絞った。

フルオートで射出される弾丸。堪らずドッグスの頭部の装甲は砕  
け散っていき、その頭部自体がはぎ取れる。

それでも構わずトリガーを絞ったまま胴体へ銃口を向けていき、  
トリガーを引き続け遂には一弾倉分を撃ち切った。

衝撃で吹き飛んでいくドッグスを見ながら、プロセルピナは装填  
する。マガジンが地面へと音を立てて落ちた。

「何処に……？」

少女は柩を探す。見つけた少年の姿は、片腕を抑えながら何処か  
の扉へと入ろうとしている姿だった。

「待つて……！」

柩を呼び止めようとした少女は、AIから告げられる敵機出現の警告に振り返らざるを得なかった。

/

「……もう、何してんの。全く」

柩の携帯は何度掛けても繋がらなかった。三十分前に掛けて、今掛けて繋がらない。病院に行っているのか、それとも“例の”隣人とやらと食事を取っていて気づかないのか……。

いや、本来携帯だからと言っていつも繋がるとは限らない。だから、本来この繋がらないというのにそこまで苛立つことはない筈。というのは、勿論美沙都にも分かっていた。けれど、どうしても苛立つてしまう。

柩に明日の学校の事で伝えなければならなかった……というのは貞操である。その実、美沙都は昼間のことでそわそわとしていた。

それは謝ろうとしていたのか、事実が気になっているのか、それとも何か焦っているのか。何とも良く分からない心境だった。

美沙都は携帯の画面に表示された柩の電話番号をじっと見つめる。そもそも、美沙都は自分の持っている感情にいまちはつきりしないところがあった。

柩は大切だ。だがそれが友人としてなのかどうなのか、そこがいまいち確信を持てない。

けれど柩に浮ついた噂がつくことを少し心配していたり、あの隣人と何かあるとなると気持ちの制御がつかなくなる。

「だからなんであたしがあいつのことで、こんなにならなきゃならないのよ……！」

そして拳句、火照る顔に我慢しきれず思考を投げ出してしまふのがいつものことだった。

現実から目をそらしているというか、問題を先送りになっているというか……そんなことを自覚してはいるものの、考え続けることが難しかった。

良く分からなかった。

そして何となく、今、不安になる。

「枢……」

携帯を開き、もう一度美沙都はコールした。

/

「……左腕が、動かない」

あのアウラの手から落ちた衝撃からか、枢の片腕は痛むだけで機能していなかった。もしかしたら、骨でも折れているのかもしれない。指だけ辛うじて動く程度だ。

「くそ……！ 何だってこんな目に……！」

それも全部アウラのせいだ。アウラの。あの、悪魔の兵器の。枢は左肩を抱く右手に力を入れる。それはアウラへの苛立ちと、

アウラへの憎悪を押し殺す為の、まるで子供がだだを捏ねる様な行為だった。

だがその“だだ”というのはとても深く強く、爪は肌を疾うに穿っていた。そこからは服の上だというのに、血が滲んでいた。

“ ”

「え……？」

だが不意に、声が聞こえた。それは入り口で呼ばれた声だった。その声は不思議な、いや、奇妙な声だった。音源は何処にも見つからないというのに、それはまるで耳元で囁かれているかのよう……頭に直接響くという形容が最も合致する。

だが、それなのに、言葉自体は何も解せない。ただ呼ばれているという直感、実感だけが枢の意識を支配する。

視界がぼやけていった。まるで夢見心地。夢ではその奇妙な状況の一切合切に違和感を感じないのと同様に、枢の意識には“それ”しかなかった。

その奇妙さは最早頭痛と吐き気すら伴っていく。ふらふらと、またも枢の足取りは彷徨っていく。

だが、今度は意識を手放さない。この“何処かへと持っていける”感覚を跳ねのけ、自身の体に意識を留める。

現実はこちらだ。この、惨劇足る寸劇が現実だ。

あるのは暗闇。その中に二点、緑色の眼が疼いていた。枢はポケットから再び携帯を取り出し、奥に向かってライトを照らす。ライトに照らされたその異形。巨大な人型。鉄の巨人。アウラ。

しかし奇妙、メディアで見るそれらより酷く華奢だった。透き通る様な純白に、端正な造りのフェイスフォルム。ライトを反射する輝かしさが、何か神秘的な存在だと全身に訴えている。

何も知らない枢でも、それは酷く異質だと理解した。  
その姿は人に似ているが、人を超越した何かを模<sup>かたど</sup>っているような  
気がしてならない。

「 天、使？」

呟く枢の目の前。

細身で純白の、全身で神秘さを纏う秀麗な 一機の【アウラ】  
があった。

それは、楽しい時間だった。

久しぶりに父が振る舞ってくれた家族サービスだった。母から笑みは絶えず、妹はずっとはしゃぎっぱなし。そしてそれらを見る父は、照れ隠しに頭を掻いていたりした。

多分、高級イタリアレストランだった。何十階だかにある見晴らしの良い場所だった。値段やネームバリューなんかは枢には良く分からなかったが、そのレストランの装飾や客の落ち着いた振る舞いなんかに、とりあえず高そうだなってことを全身で感じていた。出てきたパスタやピザらしき、かと言って今まで見たことがあるようなものではない料理からも何となくそれらの雰囲気は感じ取れた。

静かで落ち着いた空気なのに、妹ははしゃぎっぱなし。料理がおいしい、高くて景色が良い、そして何より久々の家族全員での食事ではしゃいでいた。

それを母が諭す。妹はそれに膨れる。父が苦笑する。枢はそんな場所で、自身も笑っていた。

愉しかった。久々に顔を見せた父は少し痩せて疲れていそうだったけれど、幾度も笑顔を見せてくれていた。まあ、その殆どが照れ笑いだの苦笑だので、ホームビデオに出てくるような理想的な父とは言えなかったが。

それでも、枢にとっては最高の父だった。

家に帰れず仕事に明け暮れているのは何より家族の為だろうし、その証拠に家自体は潤っていった。そしてこうしてちゃんと家族のことも考えているあかしに、食事に連れて行ってくれる。父はその日の夜中にはまた会社に行くらしい。それでも、連れて来てくれたのだ。

だが、そんな時間は一発の銃声により碎かれた。

突然だった。客に扮しスーツを着ていた男が懷から銃を抜き、ウ



エイターを撃ち殺した。レストランは悲鳴に包まれる。それを皮切りに防弾ベストを着こんだ男たちが一斉に現れた。凡そ十数人。皆その手に黒光りするアサルトライフルを握り締めていた。奇妙にひん曲がった弾倉を振りかざしてこう言う。

「床に伏せる！ 手は頭の後ろだ！」

一人の男がふざけるなと反発した。恰幅の良い男だった。その隣の隣には枢の妹と同じ年齢ほどの息子が座っていた。息子は父の腕に庇われるように抱きついていて、その男は撃ち殺された、一切の躊躇いなく。額に一発、一瞬だった。

飛び散る血潮が息子の顔に飛ぶ。瞳の色は喪われた。叫びを撒き散らし、涙を雪崩れさせた。射殺された。

異常なほど、殺すことに抵抗のない男達だった。

またも悲鳴が飛び交い始める。一人の男がライフルを乱射しながら横に薙いだ。三十発もの銃弾が横に破線をつけていく。幾つかの弾丸は客の腕や肩に着弾していた。

耐えきれず逃げ出そうとした女性がいた。真っ赤なドレスを着こんだ中年女性だった。直ぐにそのドレスはそれより濃い深紅の色で染められた。

そしてもう一度叫ぶ。抵抗するな。黙って従え。さもなければ撃ち殺す。その場にいる人間は承服を余儀なくされた。

やがて客の全員が床に伏せたのを見ると、テロリストは一人一人の顔を確認し始めた。それを枢は隙間から辛うじて覗いていた。

「怖いよ……」

隣では泣きながら結衣が呟いている。見ることは叶わない。自分の腕が邪魔だった。

「大丈夫、今はおとなしく言う事を聞いておこう」

そう言うしかなかった。

そして遂には母の番が来た。乱暴に髪を掴まれ、立たされる。痛みに呻く顔を強引に掴まれ男の前に向かせられた。外れだったのか、どうなのか、直ぐに男は母を床に投げ捨てた。そんなことを音だけで枢は聞いていた。

次は父の番だった。男にいきなり腹を蹴られた。立てと言われる。父は呻きながら、ゆっくりと立ち上がった。

「お前……？」

そう父の顔を見て呟いた途端、男の眉間には穴が開いていた。それとほぼ同時に硝子の割れる音が響いていた。

良く分からない声を上げて男は頭から倒れていった。他の男達はそれを見て一斉に銃を構え直す。そして一人の男が左右に目をせわしく向け始めた瞬間に、今度は喉に穴が開いていた。

「狙撃だ！ 狙われているぞ！」

そう叫んだ男は目を穿たれた。その男が倒れると、今度はほぼ同時に三人。頭を弾いて吹き飛んでいった。レストランは悲鳴に包まれた。

悪態を吐きながら、男達は入り口へと駆けていく。一人の男が肩を撃たれてよろめいた。一人の男は足を撃たれて転倒した。一人の男は腹を撃たれ衝撃でその場に立ち止まった。一人の男は腕を殺がれ泣き喚いた。一人の男は後頭部から撃ち抜かれた。全てが入り口から出て行く前の、一瞬の出来事だった。そしてそのあと枢が一呼吸する暇もなく、一斉に男達は追い打ちを掛けられるように射殺された。

客が一斉に何かを喚きながら立ち上がった。歓喜か、混乱か。何にせよテロリストがいなくなった途端に、客たちは走り始める。入り口を目指して、テロリストの屍を踏みつけて。

「おい枢！ 逃げるぞ！」

茫然としている枢の肩を、父 晃は叩いた。それでようやく縛られた意識を取り戻した。

枢は躊躇いながらも頷き、母の手を握る父の背中を追っていく。

「結衣、行くぞ」

泣きじゃくる妹の手を引いて。

レストランの入り口までの絨毯は既に血で完全に浸されていた。足をつける度にびちゃびちゃと音を立てて気持ち悪い。追い打つように、強烈な鉄の匂いも腹を上げる。

廊下に出た途端、晃は警官と鉢合わせ体をぶつけそうになった。

「あなた方で最後ですか？」

一旦向けた銃を下げ、警官はそう言った。晃は頷く。

警官の武装は普段見る青い制服ではなかった。黒いそれはただの衣服ではなく、防弾チョッキ。それに厚みのあるフェイスガラスのあるヘルメット。持っている銃もピストルなどではない。筒の長い、銃その物もそれに比べればとても大きい サブマシンガン。

そこで、枢はやつと気づいた。目の前の男は警官などではなく、軍隊なのだという事を。

「では、十階下にヘリが往復しております。そこへ乗って下さい。直ぐに安全な所へ連れて行きますので」

頷いた晃を見て、そこまで口早に言い切ると、不意に晃の背後へと向かって発砲した。幾ばくかの閃光と渴いた音を廊下に響かせ、目にも止まらぬ速さで弾丸は駆け抜けていく。

その着弾地点は、遠くからこちらへと狙いを定めていたテロリストの頭部だった。

「さあ、急いで下さい」

軍人は枢達を後ろへと押しやり、自身は倒れた男へと走っていった。上からやってきたエレベーターが開くと、そこにはまたも銃を持ったテロリストがいた。軍人は躊躇わず発砲していく。

「早く！」

そう背中に掛けられる声に、枢達は走り出した。結衣はずっと、泣きながら枢の腕を抱き締めていた。

枢達は階段を使って降りていた。エレベーターは使用できなかった。先ほどのように戦闘に遭い、壊れてしまったのだらう。

途中、所々の階では窓ガラスには大きな穴が開いていた。ヘヴンズタワーは外観優先で、壁というものがあまりなく、殆どがガラス張りで出来ていた。そのガラスが大きく破られているというのは、外壁には軍隊が作戦開始まで上から吊るされたロープで張り付いていて、開始と同時に蹴破って突入した跡だった。その証拠に、使い終わったロープが外の風に揺れていた。

あまりの非現実には柩は泣き喚きそうになる。しかし自分の小さな手には、更に小さな手が握られていた。柩はぎゅっと握りしめ、涙を堪える。

血の匂いと瓦礫を超え十階下に近づくにつれ、空気を裂くけたたましい音が響いてきた。多分、ローターが空気を裂く音だろう。

柩達は駆けていく。

場所は直ぐに分かった。音も酷く、冷えた風も煩いくらいに吹き荒んでいる。晃が皆に呼び掛け、走っていく。柩達もそれに続いていった。

こちらに搭乗口を向け滞空しているヘリ。搭乗口に立っている兵士が柩達に気づき、何かを叫んだ。しかし風とローターの音で聞こえない。柩達は駆け寄っていく。

「急いで下さい！ 梯子が繋がっています、慎重に、落ちないように気をつけてこちらに進んで下さい！」

救護ヘリの直ぐ傍まで寄ると、暴音に負けないほどの大声でそう叫んだ。

見れば、床の端からヘリの搭乗口まで縄梯子のようなものが掛けられていた。恐らく簡易的なものなのだろう。屋上であるならいざ知らず、こうした半端な場所ではローターが邪魔でヘリは近づけない。かと言ってタワーの屋上に避難経路を設ける訳にはいかない。屋上など、エレベーターを使ってもかなりの時間が掛かるのだから。

「柩、結衣。お前たちが先に行くんだ」

「……分かった」

空いている左手を拳で強く握り、頷いた。しかし歩きだそうとしたが、後ろに引かれ進めなかった。結衣が体中を強張らせて、固ま

っていた。指は強く握られていて離れない。

「仕方ない。俺が先に行こう。結衣、俺につかまってる」

そう言っただけは結衣を抱き寄せ、片手で抱き上げた。結衣は父の首に手を回し、晃は片腕で結衣をお尻から座らせるようにして持ち上げる。そこまでの動作はとてもスムーズだった。

不謹慎だが、こうして晃が結衣を抱きかかえている光景はとても新鮮だ、なんて枢は感じていた。

そうして、抱きかかえながら晃は梯子まで歩いていく。

「大丈夫ですか！？ 無理なら私がそちらへ言っ……」

風に髪を抑えながら兵士が問うた。明らかな不安が混ざっていて、少し裏返ってすらいた。

「大丈夫だ」

だが、そんな兵士とは対照的に晃の声は落ち着いていた。そしてそのまま屈み、片腕と両脚を使ってあつという間に渡ってしまった。あまりにも呆気なく。枢は驚き、思わず啞然としてしまう。それは兵士も同じだった。

「枢、次はあなたよ」

と、母に肩を叩かれ意識を取り戻す。頷き、梯子まで歩いていった。

言っのと、見るのは簡単だった。しかし、目の前の光景はあまりにも恐怖染みている。まず高度がおかしい。50メートルは確実に超えている。加えて強風だ。ローターと、高度故の自然の風で、張

つているとは言え梯子は左右に少し揺れている。よく見る、谷に掛かっている橋のようだった。……いや、足場が悪い分、こちらの方が危険は多いのかもしれない。

柩は一息深呼吸する。四つん這いになり、縄をぐつと掴み慎重に歩いていく。揺らさぬよう配慮し、慎重に。しかし慎重になるが故に、見てしまう眼下。そして直ぐに見なければよかったと後悔する。眼下に広がる光景は 戦争だった。ヘヴンズタワーは広大な庭を兼ねた美麗な駐車を構えていることが特徴だった。木を植え草を生やし花を咲かせた美観風景。それが今では、ただの岩肌の捲れた荒野と鉄の死骸が骸す死地と燃え盛る業炎でしかなかった。

アウラが蹂躪していた。砂煙を上げ火花を咲かせ、鉄の雨を横這いに降り注いでいく。十数発、時間で言えば数秒弾丸を浴びたアウラは即座に破裂する。その凄惨な光景を前にすると、風に紛れて兵士の叫喚が聞こえて来そうですらあった。

不意に、柩の腕が強く惹かれた。強引にヘリへと引つ張られ、父親に抱き止められる。そこで、自分が梯子の上で固まっていた事を悟った。ヘリに乗り込んだ兄を見て妹は抱きついた。柩は驚きながらも、しっかりと抱き止める。そして遅れて、母も乗り込んだ。

近くに民間人がいないことを確認すると、ヘリは動いていく。機体を僅か前屈し、前進していく。機体が不安定に大きく揺れた。

母は父に抱きついていて、晃が優しく抱きしめる。結衣が柩の胸元で涙を拭いていた。柩も自分のあがった息を整えながら頭を撫でた。そして、窓からまた地上を覗いてしまった。

赤い双眸が、こちらを捉えていた。

操縦士が叫ぶ。兵士が立てかけてあったライフルを手を取った。搭乗口から乗り出し、眼下へと発泡していく。弾丸はアウラの装甲に弾かれる依然に、ろくに届いてすらいなかった。

闇の様な深いアウラは、その体軀をこちらへとゆっくりと向けて

いく。赤い線を空中に刻みこみ、それは死神の瞳を思わせた。

「畜生！ もつと速度上げろ！」

「無理だ！ 風が強くてバランスが崩れる！」

怒鳴り合う声。耳を劈くローターの音。間近で響く銃声。父は母を強く抱きしめながら、見開いた瞳をアウラへと向けていた。枢は泣きじゃくる結衣を抱きしめながら、震える色を抱えた瞳でじつと見つめていた。

恐ろしかった。人型で人を殺す道具 そんなものを何故、人は造ってしまったのか。あれ同士が殺し合うなど、単に人殺しが“移された”だけではないか。より非人道的な方法と戦場と、死体になる為に。

黒い腕は伸ばされる。銃口はへりを捉えた。兵士はリロードし、もう一度フルオートで撃つ。

不意に、赤い瞳は嗤うように燻<sup>くゆ</sup>んだ。

「糞野郎がつ……！」

晃がそう叫んだ。

瞬間に、光に包まれ、枢の意識はそこで途切れた。

呻き、枢は目を覚ました。頭を振り、意識を起こす。

瞼を開くが、視界はぼやけていた。よく分からない視界の中、周りは明かりに満ちている事は分かった。腹這いの体勢から立ちあが



ろうとするが体が重い。加えて何だか異常に熱かった。まだ体を動かせるほど目が覚めていないのかも知れない。

咳きこみ、柩はもう一度目を細め前を見やる。そして、絶句した。地獄だった。火の海、鉄の瓦礫　そんなものしか前方の視界には入らない。だがよく見ればその瓦礫はヘリの残骸だ。ローターらしきものが地面に突き刺さっていて、搭乗口は空へと向いている。そこに引つかかるように、誰かがいた。

叫び声を上げそうになる。

「……結衣、父さん、母さん　みんなは!？」

右を見れば、父の腕が差し伸べられていた。身をよじり、その腕を掴む。助けて欲しいと願いながら。

しかしその腕は抵抗なく抜けてしまった。ずるりと。腕だけの父が、柩の身体に引き寄せられた。

「父、さん……っ!」

腕を柩は抱きしめる。愛でる様に。嗚咽を上げ、強く抱き締める。

「くそっ!」

涙を袖で拭き、叫んだ。袖は血で汚れていて顔に纏わりついたが意に介さない。柩は一度深く息を吸う。

とにかく、ここを動かなくてはならない。

肘を着き、腕の半分で体を引き摺ろうと力を入れる。少しの抵抗があったが、“何かが外れる様に”やがてスムーズに身体は動き出した。

数度繰り返し、柩は立ちあがろうと膝を立てた　が、一向に立ち上がれない。おかしい。もう一度膝を折り前に出し、体の下に立

てようと試みる。そもそも、体の下に膝が立たない。  
奇妙に思い、焼ける肌のまま背後を見やった。

「は、ハハ……うそ、だろ？」

見た光景は柩から涙すら流させなかった。ただ呼吸が止まり、広がる光景は嘘だと抵抗するだけ。

脚がなかった。膝の下からぱつさりと、冗談見たく、まるで何か料理されたかのように切り落とされていた。いや、違う。置いていてしまった。つい先ほど。体は瓦礫が乗っかっていて重かった。引つかかっていたものは外れて、前に進んだ。

柩は吐瀉物を吐きだした。先ほど食べた料理が血に混じっていく。それを見て、再び吐いてしまう。

「畜生、ちくしょう……！」

結衣は？ と視界を巡らす。燃える瓦礫の下から手だけが見えた。薄汚れてしまった、白く綺麗で小さな手。

「結衣！ 結衣！」

柩は腹這いのまま叫んだ。声に反応するように指が数度動いた。そして瓦礫は崩れ、中から結衣が這い出てきた。服は破れ、頬には血が無数に浮かび上がっている。

「お兄、ちゃん……？」

虚ろな瞳で結衣は両脚のない柩を見る。酸素が回っていないのか、ただ単に意識が戻りきっていないのか、色のない瞳を向けながら茫然とする。そうして一度ゆっくりと瞬きし、そのまま全身の力が抜

けていく。

「駄目だ！ 結衣、逃げるんだ！ お前だけでも！ 早くっ！」

声に目を絞る。身じろぎし、再び瞳は柩を捉えた。ゆつくりと、震える脚で立ちあがる。そしてもう一度結衣は兄を呼んだ。所で二人を震動が襲う。

二人は目をやる。こちらに銃を構えたアウラに。漆黒の装甲に深紅の瞳。見下し、嗤うように再び双眸は燦る。

「結衣っ！」

銃口は妹へと向いていた。叫んだ声は柩のものと。母のもの。

その母を呼びながら、結衣は抱きしめられた。そして直後に鼓膜を破る銃声。空気を掻き乱す熱波。地面を穿つ穴。銃口から巨大な弾丸は、吐きだされた。

辺り一帯の瓦礫は吹き飛び、埃が舞う。柩は両腕を顔にやり、砂に耐える。

「おかあ、さん……」

納まった所で再び前を見ると、下半身を潰された母に抱きしめられながら座りこむ結衣の姿があるだけだった。

涙を浮かべ、震える声で何度も母を呼ぶ。しかし半分欠けた母は、声を掛けるどころか、頬笑み掛けることすら出来なかった。柩は腕を伸ばしても、助けるどころか、二人には届くことすらも出来なかった。何て短く、無力な何だ。

柩の視界が歪む。目の前は現実なのか。そんなことばかり考える。ふっと、結衣は意識を失いその場に倒れ込んでしまった。

「ああああああああああああああああああああ！」

喉が裂ける、少年の慟哭が響き渡った。血が足りないのか酸素が足りないのか、やがて柩の意識はぼやけていく。

白く靄の掛かる視界で、遠くから黒いなにか近づいていた。それは、下弦の月を携え、ただ無情に見下していた。

/

「僕は、死ぬわけにはいかないんだ……」

大切なものを喪った。それは此の身を焼かれる以上の痛みだった。零れ落ちるものは決して掬えず、振り返る事はただ無に帰す。後ろに広がるのはただ現実でしかなく、それはただ涙を誘う哀しい映画フィルム。それでも、一つだけ残っていた。まだこの世界に戻ってきてすらない人。独り淵に取り残され、誰とも言葉交わせずあの日のままに止まった彼女。

喪う訳にはいかない。置いていく訳にはいかない。せめての希望すらも失くす訳には決して行かない。

「例え意地汚くとも……」

彼と彼女は兵器に因って他者の命を奪われた。残された苦しみ、待つ者の苦しみ、何も感じないからこそその苦しみ、孤独からの苦しみ、あの日から既に七年経過してしまっているその悲劇の現。

故に少年は戦争を嫌っていた。兵器を憎んでいた。それを振るう存在を忌避していた。だがそれでも。

「泥を啜ってでも……」

それでも、生きる為の理由はある。世界に残る価値はある。自分はまだ、死ぬ訳にはいかない。生きる為なら。

「戦争だつてしてやるよ……」

少年は手を伸ばす。眼前に佇む兵器。その純白とは対称を成す罪の証し。幾ら綺麗に取り繕うとも、その身は真っ赤に穢れた存在だ。まさに人から膿んだ、人に因り人を殺すもの。それでも、生きる為なら構わない。

「だから僕に手を貸せよ、兵器ヒトコロシ……！」

少年の拳が握られた。軋む骨は、未来の暗示。応える様に、天使のアウラの双眸が翠に煌めいた。

ACT・004 フォビドゥン・パスト（後書き）

冬夜

「ようやくお互い顔を見たか……主人公と主人公機」

美沙都

「ああ、長かった……長かったわ……。次話でようやくと乗るのね！ 闘うんだね！？」

冬夜

「ここまで来るのに約六万文字……！ 文庫本だったら半分くらい終わってるぜこの野郎……！」

美沙都

「皆さま、さぞ辛かったことでしょう。でもこれでやっと枢の勇姿が見れるのよ。彼が某自由さん並みに戦場を駆け巡る様をご覧下さい！」

冬夜

「いや、それがそうでもないらしいんだ」

枢

「え？」

冬夜

「まあ前回 リメイク前はほら……結構あれだったじゃん、あれ。一応伏せておくが」

枢

「まあ、うん」

冬夜

「でも今回はかなり苦勞するみたいだぞ？ 勿論何とは言わないけどよ」

美沙都

「だって最後以外はm」

冬夜

「言つな！ まあ、要はそれが無くなるんだ」

美沙都

「ああ、そうなんだ……でもあれよね。基本主人公は強い方が人気出るよね」

冬夜

「……それ言つたらだな、アクセス解析とかみるとリメイク前の方が人は来てるんだぞう？」

美沙都

「お気に入りも抜かれてるかどっこいなよね……」

冬夜

「ああ……」

美沙都

「……………」

冬夜

「……………」

美沙都

「分かった

！  
改訂じゃなくて改悪なんだ……………」

冬夜

「……………」

美沙都

「あ……………」



## ACT・005 クルーズ(1)

枢はまた建物全体が揺れた事を感じながら、薄暗いコクピットの中へと脚を踏み入れた。

構造は大まかに、球状の空間に椅子が一つ置かれているといったものだった。その椅子にはフットペダルや二つのトリガー、背後に折りたたまれた半透明のモニターなどが収容されている。そしてそれを囲むのは、無数のスイッチパネルや小さなランプ、幾つかの色彩様々なコードだった。そしてひと際目立つ、前方に供えつけられたメインモニター。

フットペダルへと両脚を乗せて、深く座りこむ。

『首筋を強く後ろへと押し当てて下さい』

強引に抑え込まれ、加工された抑揚の薄い、流暢とも拙いとも取れる独特の声波。その突然聞こえた機械的な声に僅か面食らうも、この声は疾うに“既知のもの” 唾を飲み込むだけに留まり、枢は言う通りに身体を動かした。途端に、全身に痺れが走る。

「なんだ、これ……っ!？」

それは膝の痛みと酷似していた。一瞬鋭く痛みは駆けた、かと思うと直ぐに鈍い沈んだ痛みへと切り替わる。しかしそれは波が落ち着いているだけで、決してなくなった訳ではない。いつまでも体躯全体に憑き纏う。

「くそ、なんだよ！ 気持ち悪いっ……!」

『落ち着いて下さい。身体を動かさずに、そのままです』

既に枢の耳に届く声は少なくなっていた。まるで鉛を溶かした水に浸されているよう。響く様で重い、圧迫された奇妙な感覚。

歯を食い縛り呻く枢の全身には、薄い水色の文様が浮かび上がっては消えていた。それは太い血管のように全身を駆け廻り、枢の身体を侵していく。締め付けられ、引き戻される不快な感覚。何かに呼ばれる感覚。

紋様<sup>それ</sup>には、枢自身は下ろされた瞼により気づかない。

モニターには幾つかの情報が提示されていた。網膜、血種、静脈、指紋、遺伝子情報。挙げれば切りがない。それらは全て、枢が  
枢足るに必要な情報の全てだった。

やがてモニターはウィンドウで埋め尽くされる。

『情報探査の完了』

そして不意に、それら全てが消滅すると、黒い画面に一つ“certified（認証完了）”の文字。

『搭乗者【久遠 枢】 【フェイクス】として認証されました』

「な ！？ どうして僕がフェイクスなんだ！？」

その告げられた言葉に枢は叫ぶ。有り得ない事だ、と。

【フェイクス】とは即ち、現在のアウラが業であるに於ける重要な最後のピース。パイロット本体が“アウラに付属する電子機器”に成るということに他ならなかった。

全身に施された術式。皮膚と取って代わるナノスキン、神経と取って代わるナノファイバー、血液に混ざり込むナノマシン。それら全ては電子の信号疎通を円滑にするもの。ヒトとアウラが一つ

の意志とし繋がる事。ヒトとして生を受けた体を“弄り”、機械との中間に想定する。

暗にそれは、ヒトであることを止めることに過ぎない。

「答えるよっ！」

だが、枢の叫びに返るのは沈黙のみだった。答えず、ただモニターには無数の数値が現れては消えるだけ。

『当機体は【type：fa01 ネファイル】です。以後、貴方は当機体のマスターと登録されました』

言葉を受け、枢がもう一度口を開きかけたが、

『熱源接近。所属不明機に因るものです。戦闘行動に移行します、マスター』

その言葉によって呑みこまざるを得なくなった。

いつの間にか映し出されていたモニターを覗けば、先ほど枢が入った扉は既に破壊され、幾つかのドッグスが入り込んでいた。赤い瞳は、ぎらぎらとこちらを睨みつけている。そして一度、その首は上へと上げられた。まるで獲物を前に、吠える様に。

その姿を、枢は震える瞳で見つめる。喉が鳴り唾が呑み込まれる。枢にとつての最大のトラウマが目の前でまたも牙を向いていた。

『腹を据えて下さい。マスター』

「くそっ……！」

最後に、切り替える為の毒を吐いた。一瞬、枢の身体が蒼く光る。

今更何を言っているのか。目の前にアウラがいる。ならば問い掛ける。今自らが乗っているものは何なんだと。枢は独り、口の端を僅かに上げた。

『では、行きましょう。マスター、戦闘経験はありますか？』

「ない」

『それではこちらで随時指示していきます。留意して下さい』

「分かった。……で、君はなんて呼んだら良い？」

『……』

僅かに、ノイズだけが返ってくる。

モニターではドッグスのガトリングが展開され始めていた。ゆっくりと四つの銃口がこちらを向く。

『わた、し……？』

「そうだよ、他にいないって」

またも返るのはノイズだけ。戸惑うように、それは流れる。

ガトリングが熱を持ち始めた。回転することで弾を吐きだすそれは、徐々に推力を持つていく。

『……【セラフィ】。セラフィと呼び下さい』

「分かった。僕は何も分からない。頼む、セラフィ」

一度深く深呼吸する。脳に酸素が行き渡り、視界は、思考はクリアになる。

もう一度、枢はトラウマを視界の中心に押さえつけた。そして射抜くように、眼を細めた。

「死ぬ訳にはいかない。やってやるさ。必ず生き延びてみせる。例え <sup>アウラ</sup>どんな手を使ってもだ！」

枢は強く、両のトリガーを握り締めた。  
瞬間に、ネフィルの両目は蒼く煌めいた。

/

空が橙に染まり始めてきた頃、それを黒く穿つ点が三つ。その一つ一つは互いに距離を均等になるよう取り、編隊を伴って飛行していた。

その穿つ黒い点たるものは背後からバーニアを噴出させる戦闘機 <sup>コデ</sup>試作呼称【ヴィレイグ】。その装甲は闇の様に深く黒く、燃える橙に浮かぶ“黒点”のようだった。

『今回の作戦は試験的な意味も含まれている。そこところ、しっかり弁えておけよ？』

その三つの内先頭を突っ切るコックピットの中、ノイズが混じった男の声が響いた。

そしてその声を聞く男は、パイロットチェアに腰かけ頂垂れていた。既に自動操縦に切り替えられている今、彼にとってこのコックピットに座している事は暇の一言に尽きていた。

時折、暇つぶしのように男の声が響いているだけ。

「……分かっている。だからあんな玩具を持たせたのだろう」

男の声にまず溜息で応えた彼はその後言葉が続けた。

黒色のヘッドギアをつけ頂垂れたまま、僅かはみ出す黒い前髪を少し指で弄る。そしてそのまま、彼を囲む上空を映し出したモニターを睨みつけた。

そこには後続で続くヴィレイグの姿があった。保つ距離は“機械的”に正確だった。

『理解力のある優秀な部下は良いね。全員お前みたいだったらどれほど楽か』

そう言い、男は喉でくつくつと笑っている。その言葉はこの上ない皮肉である事を自覚しながら、男は使い笑っているのだ。彼にとって、それは酷く不愉快だった。

わざと聞こえる様に大きく舌打つ。

『そしてもう一つ、最も重要な事だが』

「そろそろ探查圏内に入る」

倦怠に俯いたまま、そう遮る。当てつけの様ではあるが、現に経済水域に到達するのだから事実である。勿論当てつけでもあるのだが。

男は呆れたように息を漏らすと、まあいいかと終わらせる。

その他には何も掛けられる言葉は無く、通信はそれで終了した。他に掛ける言葉は何もなかった。

「……………」

彼は独り、目の前に広がる海原を睨みつけていた。  
彼はまだ若い、二十歳にも満たない少年だった。

/

「撃つて来た……っ！」

体中に刺さるコードを力技でネフィルは引き抜く。たたらを踏むように右前へと脚を踏み出し、弾丸を避ける。しかし初動が遅いせいでかわし切れず、右肩に数発被弾した。

当然、それだけで終わる筈がない。後を追うように銃口は動き、それにつれて背後の壁には無数の弾痕が開いていく。

ネフィルは一步一步、ドッグスとは垂直の方向へと歩いていく。それはまるで初めて歩き出した赤ん坊のようにもたもたとしたものだった。

「なんだ、どうすればいいんだ……！？」

『落ち着いて下さい。私を　いいえ、ネフィルのことを想って下さい。そうすれば貴方は自ずと理解できる筈です。現に説明もなしに脚を踏み出している。落ち着いて』

「想うって、そんな……！」

言う間にも、ドッグスのガトリングは捉え続けている。弾丸が飛び、それはネフィルの装甲に火花を生まれさせる。

『理解しようと気持ちを傾けて下さい。ヒトと接することと同じです。性質、傾向、挙動 それらに興味を持つように』

「理解、するように……興味を、持つように……」

よたよたとした歩きが次第に整っていく。腰は落ち着き、その一歩一歩のテンポも増していく。まるで、歩きに慣れていくように。

『そうです、そうやって心を通わして下さい。貴方が歩み寄れば必ず応えます。 それでは、背部にあるブースターを。ネフィルアウラは基本的に脚部裏に球性ホイールが備わっています。故にブースターによるスライドは容易であり、効果的です』

一度、二度とブースターに点滅するように火が灯る。そして三度目、青い火が消えることなく、それは継続してネフィルに推力を持たせた。

移動するにつれずれる重心に合わせ、腰を落としていく。そのままネフィルはドッグスを見据え、ガトリングの動きを先回るようにスライドしていく。枢のいるコックピットまで、脚部の起こす火花の悲鳴は響いていた。

「ああ、なるほど……分かって来た」

『それは何よりです。では、武装の展開を。声に出さず復唱して下さい。 【CNK単分子ナイフ】』

言われた通り、ネフィルを地面の上で滑らせながら、頭の中だけで復唱する。

途端に、両腰に搭載されていたナイフが展開された ことを感



覚で理解出来た。自身でも奇妙だなとは思うが、柩にはまるで当たり前のことのように理解出来ていた。

だが噂通りではあった。フェイクスとは即ちそういうものなのだ。よく謳われる文句だ “フェイクスはアウラを自らの手足のように扱う” と。ただこれは謳い文句などではなく、文字通りの事実。

生き物は自身の筋肉の動かし方を知っている。誰に言われずとも、脳から神経を通して末端筋肉までにシナプスを伝える術を熟知しているように。

それは遺伝子に情報が刻まれているからだ。彼らが受け持った肉体の説明書は読まずとも既に理解している。

だから言われるのだ。フェイクスであることはヒトであることを止めているに過ぎないと。彼らの起こす偉業は即ち、“フェイクスはアウラの遺伝子を受け入れた” ということに等しい。

ネフィルは腰のキャンパーから柄のみ射出されたナイフを取り出した。右は逆手、左は順手に。巨大なダガーナイフは、ネフィルの指にしっかりと握られた。

構え、ドッグスを見据える。途端に“ネフィルは瞬間移動した”。

「なるほど、さっきまでのあのアウラの動きはこれか」

毅然たる騎士のアウラ。柩の身を守っていたあのアウラは、幾度もこうしたテレポートめいた動きをしていた。その動きを、柩は“既に再現していた”。

光が部屋を照らし上げた直後には、ネフィルはドッグスの真横へといった。

ネフィルは右の腕を振り被る。勢いよく振り下ろされたナイフはドッグスの首元に深々と突き刺さった。火花散りながらも、それは抵抗なく装甲を突き破っていく。

鍰の位置まで突き刺さったのを自覚すると、今度は左のナイフを横から突き刺す。同じく深々と突き刺すと、交差させ、まるで千切

るように首をはねた。

オイルを零しながらドッグスの首は地面に落ちる。頭部は爆発、そして制御を喪ったドッグスの首から下はふらふらと彷徨い、やがて頭と同じ運命を辿った。

「残り、二機……」

ゆらりと、純白の天使は振り向いた。

カメラアイ

蒼い目の先には、ぎりぎりとガトリングの銃口を修正している二機のドッグスがいた。

## ACT・005 クルーズ(2)

優紀は山の中駆けていた。そして、右腕を左手で抱いていた。その抱く指の間からは僅かに、彼女の赤い血が滲んでいた。

それは彼女が射殺仕損じた敵から、逃走の途中で受けたものだった。いや、正確には“損じた”という表現は間違えているが、事実彼女は自身が殺し損ねた敵からその傷を受けていた。

その阻んだ敵全てが手負いとはいえ、二桁近いほどの人間が剥き出しの殺気をそのまま行動に移せば、幾ら熟練の者であっても手負うのは不自然なことではない。

優紀はハンカチを口で破り、片手と口を使い器用に傷口へと捲いていく。致命傷ではないが、腕からこのまま垂れ続けるというのは頂けない。そうして優紀は応急の止血を走りながら済ませる。

やがて優紀は立ち止まった。

目の前には何もない、ただ草の山があるだけだった。と、傍から見れば思うだろう。

優紀はその草を握り、思い切り後ろへと引く。すると、その草は一斉に動き、やがて一つのものを露見させた。

ギリースーツ

アウラ。草は迷彩服、それに隠れていたのは鋼鉄の巨人。凡そ六メートル“ばかり”の兵器を隠すにはそれで十分だった。その嘆くべき事実には優紀は嘆息しながらも、自らの機体 【ミネルア】へと乗り込んでいく。

アウラとは、戦争によって使われる兵器である。だが、それ一機を造るのには従来の兵器とは比べ物にならないほど膨大な資金が掛かっていた。悪魔を造るにはそれなりの代償があるということ。

とはいえ、それは“イモータルアウラ”のみである。

イモータルアウラ 通称IMは、アウラを総括した中でも群を抜いて危険な存在だった。

端的に言ってしまうえば、基本性能が違いすぎるということ。そし

てそれを引き出せるのは現行アウラに軒並み適用されている汎用性オペレーションシステム【スレイブシステム】に頼っていないからだった。

オペレーションシステムとは、即ち平均適用化という目的を持ったソフトに過ぎない。万人が扱えるようになる、だがそれは万人が扱えるようなものにしか所詮はならないという事だ。

それは個々に適応したものではない。パイロットにしろ、アウラその物にしろ。

しかしIMは各々独自の機構で持つて動作していた。精々燃料と言う物こそ同じなだけで、他のアウラに流れるシナプス流動システムから既に一般のものとはかけ離れている。

そしてIMは、各“部品”<sup>フェイクス</sup>に駆動から全てのシステムを洗練された“専用機”<sup>マスター</sup>だ。

故にIMは特定の人間にしか扱えない、言わばワンオフ機体である。生産が安価になるようルートを造られた量産型のアウラとは、あらゆる面で異なっていた。

そして彼女、優紀が乗り込んだミネルアも、正真正銘のIMであった。細身で見た目こそ華奢であろうとも、その武力はどの物差しで測れば良いのか惑う程。

「それじゃ、行きましようか」

深く座りこんだ優紀はそう静かに言った。

優紀の呼び掛けに答えるように、メインモニターに明かりがついた。

/

巨躯の天使は既に動き出していた。またも開くミサイルの口。濁

流の根元。絶望を流し込むそれは、“底”というものを感じさせない。

警報と共に現れた巨躯の天使は、ミサイルを翼にして降り立った。  
オレンジを身に纏い蒼の目を灯らせる彼の巨人の姿は、最早壯観ですらあった。

だが少女には命を奪う悪魔でしかない。

ミサイルの口からオレンジライトが漏れだすのを見ながら、少女は巨人の目を通して視界を巡らす。移るのは壁と破片、そして散らばる狼の死骸だけだった。少年はいない。

濁流が溢れ出す。耐えかねたように、氾濫した川のように空間を掻き乱していく。五月蠅いその轟音は、大気を斬り裂いて。

プロセルピナはミサイル目掛けて、右手に持つマシンガンを撃ち放った。だが射出された弾丸が撃ち貫いたのは 自身が放ったグレネード。

当たり前の事だが、グレネードの破壊力とは爆風と、其れに伴う破片に因る。ならばグレネード自体が着弾することに意味はない。彼女はミサイルの面と着弾する前に、否、まだ窄む前のミサイルの間を縫って、自ら損壊させた。

敵のミサイルは未知数である。だがミサイルである以上、その異質な効力を成すのは必ず爆発に伴う風である。ならばと、彼女は自身のグレネードに掃除をさせたということだった。邪魔だった

“彼女があゝのミサイルの雨の中を突き進むには”。

広がりを持ったままのミサイルは、突然起きた爆発により空洞が出来た。其処へ、プロセルピナは駆けていった。

天使はまだミサイル発射の処理を終えていなかった。少女の予想通りだった。何も好き好んで鈍重な動きをする訳がない。あれだけの量のミサイルを使用するには機体の 或いは“操者”の頭脳に相当な負荷が掛かる筈。

「このまま……っ！」

プロセルピナは幾度も背後の出力を爆ぜさせる。数度に渡る瞬間<sup>ステ</sup>移動は瞬時に彼我の距離を縮めさせた。

少女の脳裏に熱量限界の警報が響き渡る。だが、それは無理矢理思考の外に追いやり、前を見据えた。

プロセルピナは、天使へと猪突した。それは何の小細工のない、力押し of 真正面からのものだった。金属同士の破裂音が響く。

少女の叫びと共に、巨人の身体は後方へと押されていく。その叫びを掻き消す様に、二機の脚部が鳴らすけたたましい悲鳴が上がり続ける。

天使は睨むように再度眼に蒼を灯らせた。ミサイルの口が開く。

だが、プロセルピナのグレネードは装填を完了していた。そして、既に天使の背後は壁へと衝突しかけていた。

二機の姿は爆風に包まれる。

少女はただ少しでも “少年から危険が離れる” という事だけを考えていた。

/

「あつはつは！ 幾らこいつらでも雑兵は所詮雑兵……ってね」

アルメニア・アルスはその鉄の脚で、つい今しがた斬った“雑魚”を踏みつける。そして四肢を奪い取った深紅の剣を首元に突き立て、遂には五体全てを失わせた。

彼女 イリウム・クリスタルはコクピットの中、大きく伸びをして、加えて欠伸すらした。更には首をだらしなく鳴らす始末。それだけ彼女は余裕の戦闘を繰り広げたということ。彼女が駆るアルメニア・アルスの背後には、実に五機もの鉄の死骸が転がってい

るというのに。更に言えば地面は愚か、周りに聳える山の肌でさえも無残に削られている。銃の爪痕だろう。それでも彼女にとっては“その手に持つ剣のみ”で闘うというのに、欠伸の出るものだったのだろう。

アルメニア・アルスは、薄い鉛色をした灰の騎士だった。異質な点は多々ある。細身であること、地面に着く程の長い燃える様に赤く細い髪が結えられているという事。だが何より異質は、彼ら地に伏した死骸が見たアルメニア・アルス独自の駆動機構。

「敵さんもこれだけ手薄ってことは、やはりこつちと同じ状況だったという事が……いやはや、ある意味運が良かったというか　残念と言うか」

そう言い、溜息を吐いた彼女の視界の端の空、陽が沈み始め橙色に染まっていた。其処へ現れた、三つの黒点。

機械的に編隊を保ちつつ、確実にこちらへと近づいてくる不穏な影　イリウムの口の端は、隠そうともせず、上がっていた。

満足に相手出来るのは周囲の防衛が固められるまでの僅かな時間。それでも、例えそれだけでも、彼女イリウムは刺激というものを求めている。

ACT・005 クルーズ(3) (前書き)

久々の投稿です…



## ACT・005 クルーズ(3)

「見えた……………チッ、既に先遣部隊はやられた後か。使えない奴らだ」

視界に広がるモニター、その端にある拡大された景色では、五機のアウラが地に伏していた。そしてそれらを足蹴にする 灰色を塗りたくられた一機のアウラ。

「“灰猫”か……………」

ヴィレイグに乗った少年は、瞳を絞りながら言葉を吐いた。

“灰猫” それは戦場を駆ける様からつけられたアルメニア・アルスの異名だった。

そうして少年がトリガーを握る指に力を入れた瞬間、“灰猫”は紅い瞳を向けてきた。思わず、少年は身を震わせてしまう。

怯えている訳ではない。むしろ彼は 。

徐々に近づく彼我の距離は、やがて千の距離を切っていく。

「行くぞ。各機展開。目標は “灰猫”の大破だ」

その言葉を皮切りに、後続のヴィレイグらは左右に分かれていく。少年が駆るヴィレイグは正面から。そして残りの二機で挟み込むと言う目論見だった。

灰猫が本領を発揮する間合いは近距離だと言う事は知っていた。攻性主力武装は二対の剣のみ。故に遠距離を保ちつつ、外側から火力を集めていけば容易に崩せる相手 というのが、計算上での分析であった。

しかし、彼はあの“化け猫”がそう単純に数値で測れる相手では

ないことを知っている。

灰猫の足元から突如土煙が上がった。ということを確認した直後には、既に灰猫は空中へと飛び出していた。

その様はまるでヒトの娯楽である“ローラースケート”<sup>トリック</sup>の技を見ているかのようなだった。先に起こった戦いで捲れた岩盤が周囲には多くある、恐らくそれを使い、跳ねたのだろう。何せあの猫に“継続稼働可能なブースターは装備されていない”。そうするしか手段はないのだろう。

そうして灰猫は左腕を伸ばす。<sup>ヴィレイグ</sup>此方へ手の平を向けて。

「来るか……！」

彼はそう漏らすと同時に機体を縦へと傾ける。直後に掠めたのは伸ばされた“アンカー”。それはコードで灰猫の手の平へと繋がっていた。

回避に成功したことを確認し、ヴィレイグは両翼に付いたバルカンを掃射する。

しかしそれは灰猫に被弾することはなかった、脚部の裏から発生したブースターによって。それは一瞬だけの強烈な爆発、そう正しく爆発である。

少年は舌打つ。その間に灰猫はコードを捲き取り、もう一度アンカーを射出した。

だが狙うのは少年の乗るヴィレイグではなかった。灰猫の腕は右翼へと向けられ、挟み込もうと回り込んでいたヴィレイグに深々と突き刺さる。

「糞が！　これだから人形は……！」

少年は機首を大きく曲げていく　が、それは既に間に合わず、灰猫はヴィレイグに取りついていていた。

この両手に仕込まれたアンカーが、本来近距離でしか戦闘を行えない筈のアルメニア・アルスに対する計算を狂わせる要因であった。アルメニア・アルスが持つ唯一の遠距離武器……とは言え、アンカーの伸びる距離などたかがしている。筈なのだが、そのアンカーの脅威を十倍にも二十倍にも大きくしているのがアルメニア・アルス自身が持つ特異的な機動性だった。

コードを捲き取り張り付いた灰猫は剣を持った右腕を振り被る。その剣の刃は血を吸ったように朱を帯びている。

「くっ……間に合わない！」

灰猫の剣　灼熱を帯びたブレードは勢い良く振り下ろされた。ヴィレイグの闇のような装甲は炎のような刃に貫かれた。箇所は丁度コクピット部分。例え機体が無事であってもあれでは駆る者がやられている。

少年の駆るヴィレイグはバルカンから弾丸を吐きながら猛進していく。それを予測済みだった灰猫は、ヴィレイグの軌道上に即座にアンカーを射出した。ヴィレイグは避けざるを得なく、機首を灰猫から逸らしていく。そのせいで、灰猫へと向かう弾幕は理想より遥かに薄かった。

その弾幕に剣を盾に猫は凌ぐ。

「何という無茶な……」

少年は思わずそう漏らしていた。確かに向かった弾丸は数発ほどとはいえ、それを刃で受け止めるなどあまりにも冒険過ぎる。だが、そのような無茶な動き故に彼の機体は“灰猫”と恐れられているのだ。

防ぎきった直後、アルメニア・アルスはまたもアンカーを伸ばしていた。その矛先は少年の駆るヴィレイグ、間髪入れることのでき

ない間に少年は驚きに目を見開いた。

「（ベータ）”ッ！”」

咄嗟に少年はそう叫んだ。叫びに応え、少年の機の近くまで寄っていたヴィレイグがアンカーの軌道上に割り込んでいく。

という名は、ヴィレイグに乗るパイロットの名だった。

/

「あいつ……味方を捨てやがった」

イリウムは疾うにあの三機の機体の内、どの機がリーダー格であるかは確信していた。故に手足となる駒を排除した後、即座に頭を落とすという思惑を巡らせていたのだが、イリウムの予想より遥かに躊躇なく頭は手足を切り落とした。

アンカーは深々とコックピット部に突き刺さった。元々脆い個所だ。あれではパイロットは一溜まりもない。

部下を思う長なら部下を捨てることに躊躇する。感情のある部下なら自身が命を落とすことに躊躇する。しかし彼らは一切の迷いもなく動きを見せた。それがどういふことなのか……と考え始めた所で“彼ら”には無駄だろうと見切りをつける。

そして先ほどから、これら戦闘機は何かに似ていると頭を捻っていたイリウムだったがその何かが今になって漸く理解出来た。それは“彼ら”にもお似合いであるため、口の端が上がってしまう。

「……“蠅”だな」

そう言つと、イリウムはアンカー伸ばした腕を横に薙いだ。腕の動きに追従し、アンカーの先についたヴィレイグは宙を舞う。その先は生き残りのヴィレイグ。それはまるで“蠅叩き”の様であった。しかし流石に“蠅”のように“叩き”の部分が当たるということはなかった。イリウムもそれは承知の上で、外したと踏んだ瞬間、足元の破損し落ちていくヴィレイグを蹴り、元の位置に戻ろうと腰を落とす。

その瞬間に、ヴィレイグは機首を急激に変更しアルメニア・アルス目掛けてブースターを噴射させた。

驚きに一瞬息を呑むも、イリウムは冷静に剣を構えさせる。

このまま突貫してくるのであれば、アルメニア・アルスも損傷がある程度受けるものの敵が受けるものと比べれば微々たるものである。既に弾丸の威力は図り終わっていた。所詮はけん制用、最悪直に喰らつても箇所をしっかりと外せば致命には決して成り得ない。

そう判断を下すイリウムの目に飛び込むのはそのまま突貫してくるヴィレイグの姿。直後、愚かだとそう高を括ったイリウムの目は見開かれた。

剣の刃がもう少しで当たると言う所で、ヴィレイグの装甲が一部<sup>バージ</sup>“切除”された。首は折れ、翼は畳まれ、脚と腕が生えてくる。一瞬前まで戦闘機の姿をしていたヴィレイグは、やはり刹那の内に、ほぼ完全な人型へと移行していた。

「変形機構!？」

驚きに対処の遅れを取ってしまったイリウムは間に合わず、剣は踏まれ、アルメニア・アルスはヴィレイグの両腕に固められた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0411k/>

---

A.U.R.A. The revision

2010年10月15日13時21分発行